始

2653
205

保科寅治著

一線累進式樂譜教授法

合資會社共益商社書店發行

大正
13. 8. 14
内交

263-205

はしがき

視唱教授については

略譜視唱法

本譜視唱法

略譜より本譜に入る法

等、其議論はなかなか盛んであつたのですが、今や視唱法は、本譜に依るべきものである、と云ふ批判に異議を挾むものはないと信じます。

併し、兒童にいきなり五線の樂譜を用ひて教授する事は、非常に困難である。然るに一線若くは二線を以て教授する時は、更に何等の困難もなく其成績を擧げ得るのであります。

此の經驗は數年前より研究的に試みて居たのでありましたが、米國のルーミス

氏は、既に其方法を考案して實績を擧げてゐる事を、其著者によつて知つたのであります。これが爲に大に力を得て、益々努力して研究を繼續して來ました結果ここに

一線累進式樂譜敎授法

と題して發表したのであります。固より研究の餘地は多々あります事無論でありますが、幸にも兒童音樂界の爲に、參考の一端ともならば光榮の至りに存じます

大正十三年五月

著者しるす

一線累進式樂譜敎授法目次

緒　　論……1
樂譜の說明……6
音　　符……6
一　　線……7
拍　　子……14
手拍子……15
二拍子の稽古……16
第三音……17
休止符……18
二分音符……21
二　　線……30
第四音……31
第五音……31
拍子上の注意……37
三　　線……43
四拍子……47

主音以外の音より起る曲……50
帶とスラー……56
主音の位置變更……59
主音の位置交互練習……64
四　線……68
五　線……73
五指運用……76
譜　表……77
高音と低音……78
第二線を主音とする……80
高音部記號……82
調子記號……83
拍子と拍子記號……84
ハ　調……85
ニ　調……89
變ホ調……92
ヘ　調……94
音　符……97

休止符……99
八分音符……100
ト　調……102
樂譜に親しむ……104
三拍子……105
附點音符……111
弱起拍子……118
六拍子……120

一線累進式樂譜教授法

保科寅治著

緒論

樂譜は五本の横線を土臺として、之に種々なる記號を記載して運用するものなることは、今更述べる迄もないことであ。これを初めから五本を用ひることをせず、最初は只一本の横線に依つて始め，順次二本となし三本四本五本と進めて教授するのが、一線累進式の主眼とする所である。

樂譜教授に伴なつて起る問題は、音程である。單に譜を見て ドレミ を讀むことが出來ただけでは、何等の功果も無い、其の示された高低を見わけて、樂譜通りに唱ひ得るに至つて、始めて目的を達したのである。從つて樂譜教授と音程

練習とは、引き離すことの出來ないもので、是非同時に指導して行かなければならないものである。此點は教授者の最も注意すべきことである。

一線累進式に於ては、何處までも音程練習と併行して進み、完全なる視唱法に行くべき土臺を作るのである。

音程練習に於ては、先づ隣り合つてゐる音の高低を理解せしめることが肝要であると思ふ。依つて初めは、二度音程の形式を取つて指導することゝしたのである。

練習に用ふる曲節は、現在唱つてゐる歌曲と同一程度の樂曲を用ふるのではない。兒童の能力に相當した、簡易なる音程練習に適應の曲節を用ふるのである。

樂譜を稽古するについて、兒童が最も苦痛を感ずることは、音の高低と長短と

が同時に出て來ることである。そこで、長短の方は後まはしにして、專ら高低を會得せしむる事に努力するのである。依つて當分の內は、四分音符のみを用ひて稽古する。これについては、隨分議論もあらうと思ふが、自分は過去の經驗から割り出した自信に依つて、斯く極めたのである。四分音符の運用がほゞ出來た所で、四分休止符を交へ、更に二分音符を加へ、五線に至る迄、此四分音符と四分休止符、二分音符だけで進むのである。

練習に用ふる曲節は、文部省編纂の小學唱歌集、幷に尋常小學唱歌を主なる參考とし、其の他は兒童に親しみ深い歌曲の內から取入れることにした。之を、豫め承知して置いて頂きたい。

此稽古は、第二學年二學期頃からが適當であらうと思ふ。然し其程度は、學校

に依つて、一樣には行かないのであるから、兒童の音樂的能力を考察して、適當の時期より始め、適度に進むべきではあるが、第二學年に於て一線を了し。第三學年に於て、二線三線と進み、第四學年終業迄には、五線全部を使用し得るの程度に進め、第五學年に於て、簡易なる歌曲の視唱を指導し、第六學年に至つては、其の學年相當の歌曲を視唱し得るに至らしめ、卒業迄には、簡易なる一般歌曲を視唱し得るやう導きたいと思ふ。又導き得ると信ずるのである。

拍子　**調子**等の理論は、五線を使用して樂譜を運用する時に至つて、始めて教授するのであるが、其の拍子の實際は、手拍子　タクト　其の他の方法に依つて、不知しらずの間に、教師の手心で指導して行かなければならない。

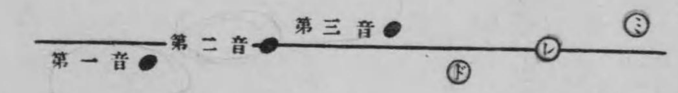
此視唱基礎練習は、毎教授時間の幾分を割いて、少しづゝ怠らず練習する事に依つて、始めて効果のあるものであつて、思ひついた樣に偶々の練習は禁物である。又一度に長い時間を取ることもよろしくない。少しづゝ回數を重ねて反復練習以て搖がざる土臺を築いて欲しいのである。

樂譜の説明

音樂の曲節を、視て解かるやうに書き表はしたものを樂譜と云ふ。樂譜は、五本の横線より成り立つて、之に種々なる記號を記載して、運用するものであることを知らしめ、其の順序として、最初は一本の横線に依つて稽古すること、同時に、音符にも種類が多いのであるが、先づ當分の内は、わかり易い音符だけを用ふることを了解せしめて置く。

音　符

最初に用ふる音符は、圖の如き圓點　即ち四分音符の符頭のみを用ふるのである。



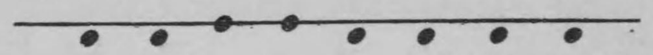
一　線

一本の横線は、線の下部空間を第一音とし、線上を第二音に當て、線の上部空間を第三音とすることを約束する。

これで　一本の線に於ての　**ドレミ**の位置は了解したのであるから、第一例に依つて稽古を始める。

最初に階名を讀む稽古をなす、但し此場合には　音の高低にかまはず、單に**ドドレレドドド**　と讀むことを以て滿足するのである。

1



階名を讀むことが出來たならば、今度は樂器で奏ひて聽かせ、次に音の高低を譜の示す通りにして唱はせるのである。

調子は　**ト調**又は　**ヘ調**で取扱ふ。

爰に於て注意する事は、譜を　**讀む**と　**唱ふ**、とについて、次の如く約束して置く事である。

譜を讀む　と云ふ時は、音の高低にかまはず、單に階名を讀む、

唱ふ　と云ふ時には、示された高度に從つて、高低を明かにして唱ふ。

これを區別して置かないと不便である。

樂譜の稽古と同時に、二度音程の練習をするのではあるが、主とする所は、高低の見わけであるから、音程の方はアマリ嚴密に云はないで置く。

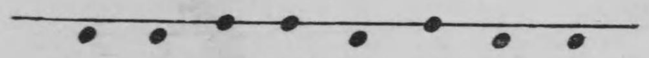
第一時は此のくらゐにして、第二時に於て略ぼ同樣の練習をなす。

斯う云ふ風にして、順次例題に依つて、高低を鹽梅して練習を重ねるのである。

2

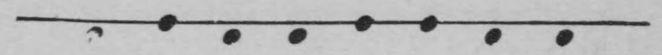
（ト調で唱ふ）

3



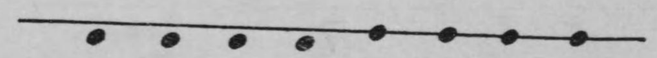
（同じくト調以下これに準ず）

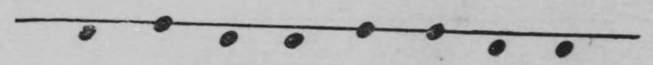
4



以上の例題が出來るやうになつたならば、更に次の如く延長する。

5

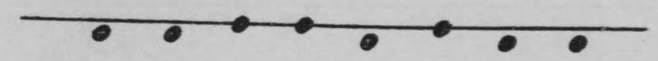




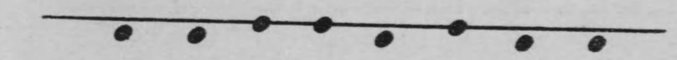
（小學唱歌集 かほれの曲 引用）

前に習つた曲と同じやうで異つた曲，

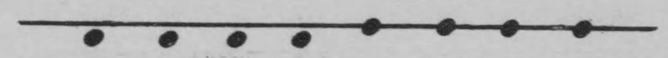
6

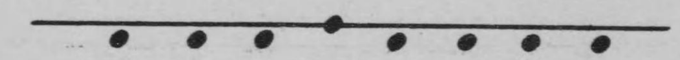


7

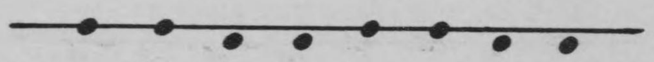


8



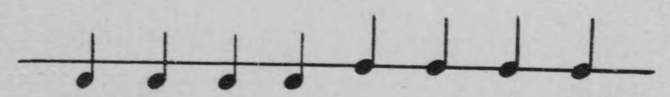


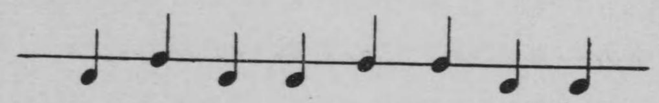
9



此の數回の練習に依つて、ドレ の二音間に於ける高低の視唱は、ほゞ會得したことゝ思ふ。依つて、今迄團子狀のみであつた音符に、符尾を附けて、リッパナ四分音符として兒童を喜ばす。但し音符の名稱等は授けるのではない。

10





此曲節は、前に習つた旋律であるから、兒童は苦もなく唱ひ得ることは云ふ迄もない。これは、反復練習を重ねて、一面音程練習の便に供し，一面に於ては，樂譜と云ふものは、さほど困難のものではない。割合に覺え易いものである、と云ふ感じを持たせるための用意である。

拍子

拍子 樂曲は、總べて一定の拍子を保つて進行するものであることを說明し、其の拍子を見てわかるやうに、縱の線を以て仕切をするものなることを知らしめ、此の一區劃を、二つに數へて唱ひ．又三つ或は四つに數ふる等、種々あることを知らしめて置く。

手拍子

此時分から樂譜を見て、手拍子を打ち、これに合せて唱ひ、又聽かせて、可視的に拍子の感念を養ふことに努むるのである。手拍子は、敎師が タクトを以て指揮すると同樣に、二拍子ならば、打ち下ろす時を一とし、上げる時を二として數へて取るの方法が一番良いと思ふ。

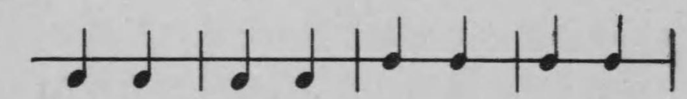
此時分の兒童に、あまり理窟めいた事は禁物であるから、アツサリ說明して置いて、其の理論は高學年に讓るのである。從つて小節內の强弱等については、嚴密に說話するの必要はない。單に縱線の右にある音符は、勢があつて、縱線の左にある音符は勢がないものである、と云ふ事だけを知らしめて置けばよい。此種の事項は、敎師の工夫と努力とに依つて宜

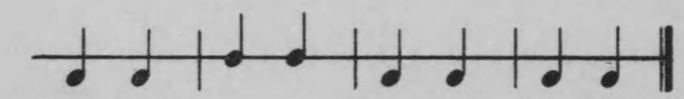
しく無言の間に於て、適當に指導して行くべきものであらうと思ふ。

二拍子の稽古

二拍子　一仕切り(一小節)を一二と二つに數へて唱ふ事を約束する。教師が樂譜を指して、兒童に拍子を呼ばしめ，次に教師が階名を唱つて、兒童に拍子を取らしむる等の方法を以て、二拍子の大體の樣子を知らしむ。最後の復縱線は、曲の終りを示す記號である事も知らしめて置く。

11

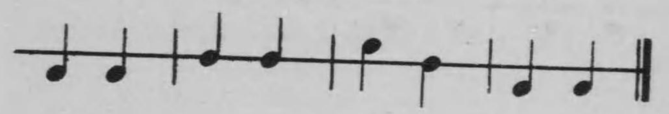




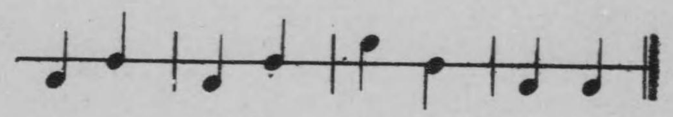
第三音

ドレ　の二音間に於ける高低は、ほゞ了解したと見たので、第三音を加へて稽古する。第三音が加はると、高低の巾が廣くなつて來るから、一寸趣のある旋律を取扱ふことが出來る。從つて、音程は少しむづかしくなるが、當分は隣り合つた二度音程を主として、簡易なる三度を加味して稽古するのである。

12



13



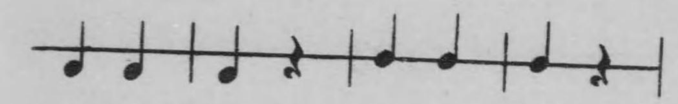
休止符

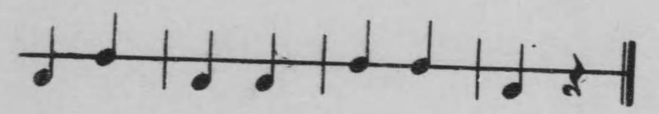
第三音迄運用することを得て、小節も會得したので、今度は**休止符**の事に進む。

樂曲の進行中には、時々**默止**する所がある。此默止を示す記號は 𝄽 これである。此の**休止符**の休む長さ（時間）は ♩ この音符と同じ時間であることを知らしむる。

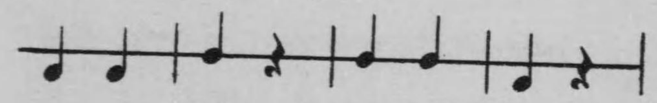
又前に習つた曲節を利用して、これに休止符を交へて稽古すること數回、此數回に於て或程度迄會得せしむるのである。

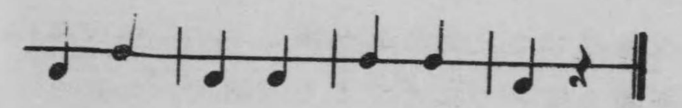
14



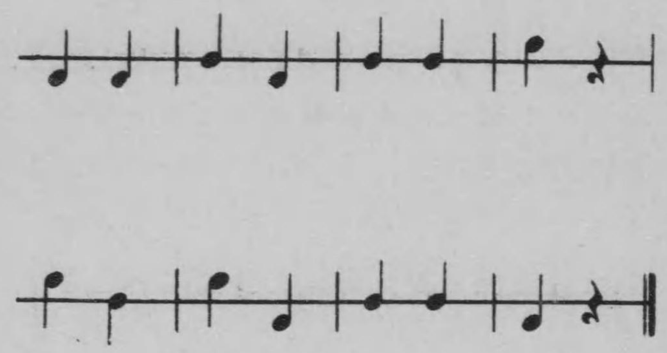


15

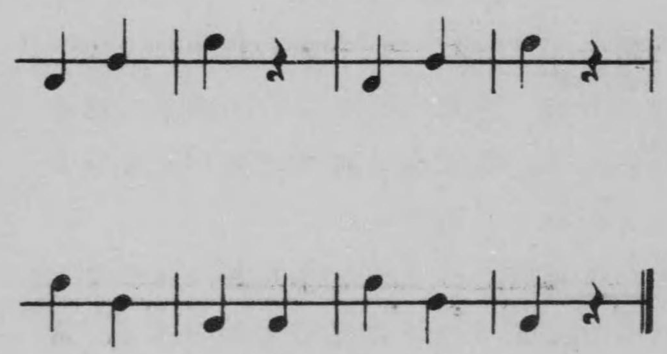




16



17



教師が鞭を以て、黒板にある樂譜を指して拍子を數へる場合に、特に休止符の所を、わかり易いやうに工夫して示し、全く音符と同一の時間默止するやう指導するのである。

稍もすると、休止符のすぐ前の音符を延ばす習慣を附け易いから、注意すべきである。

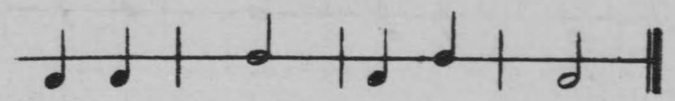
二分音符

高低の見わけに關する基礎的知識は、ほゞ出來たと思はれるから、極めて簡易な長短と、高低とを同時に見わけて行くことを課するのである。

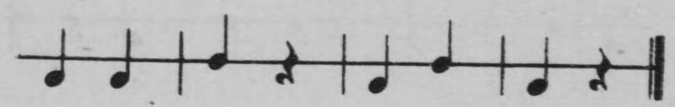
然し休止符の出て來た事も考へねばならぬので、先づ二分音符だけを加へて、當分は　四分音符と二分音符の二種だけと

する。

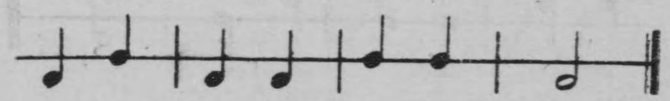
18甲



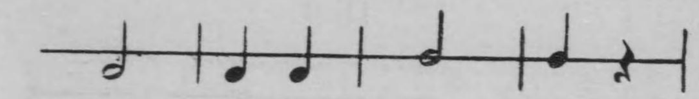
18乙

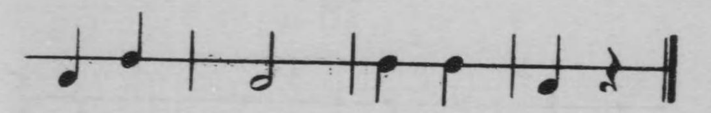


19甲

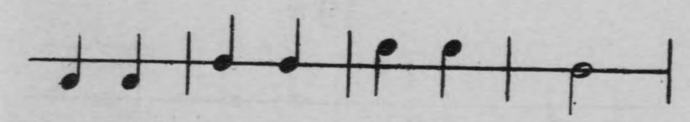


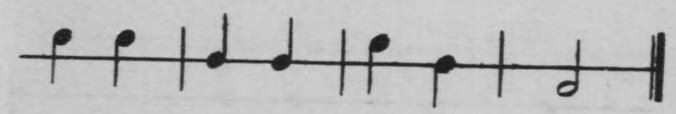
19乙



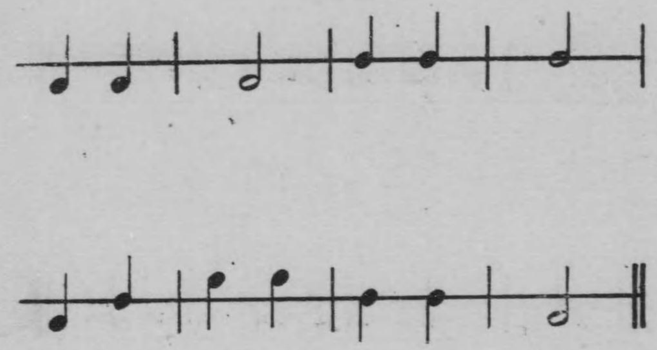


20

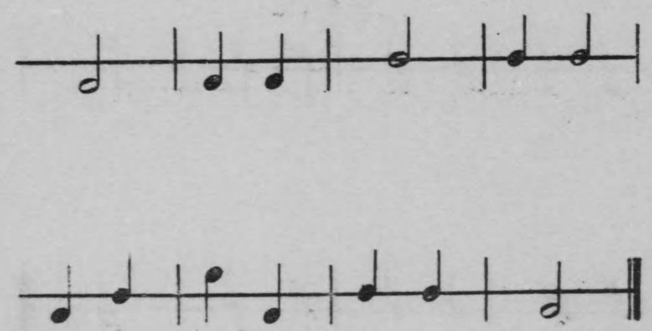




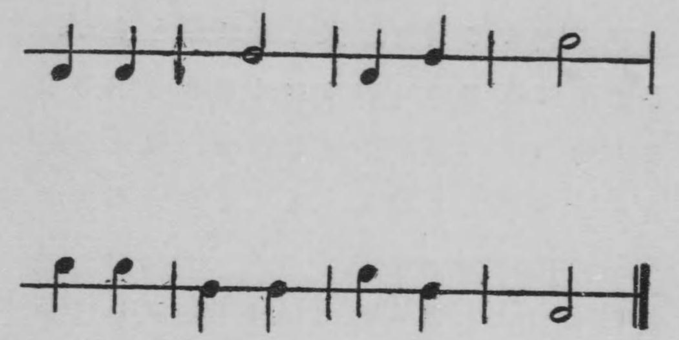
21甲



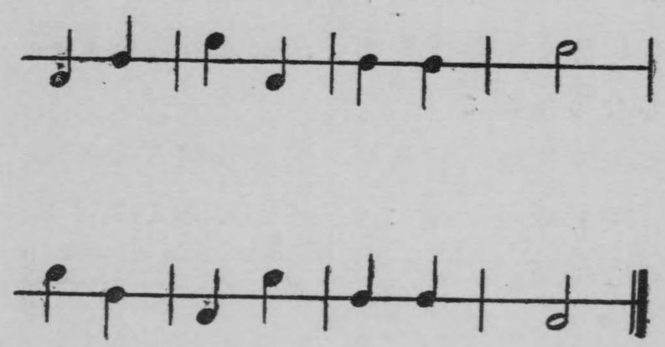
21乙



22



23



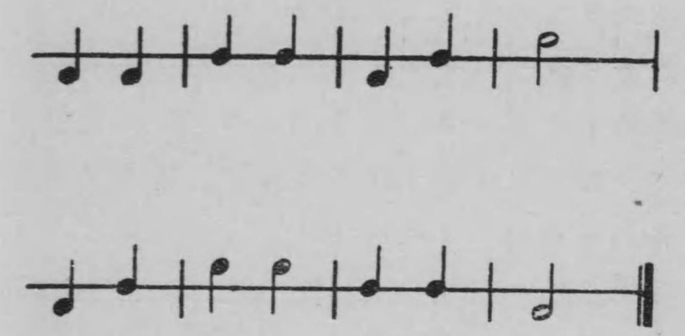
二分音符と四分音符の唱ひわけは、音の長短に關する土臺を築くのであるから、拍子を數へて見せ、又兒童に數へさせ、手拍子に依る等、成るべく興味を引き立て、時々次の如き作業を行ひ、兒童の好奇心を利用して指導することが肝要である。

前に唱つた　**24**番に一寸手を入れて休止符を交へ、乙の如くして唱ふ。この稽古は、時に依つて骨の折れることもあるが、案外おもしろく行くものである。

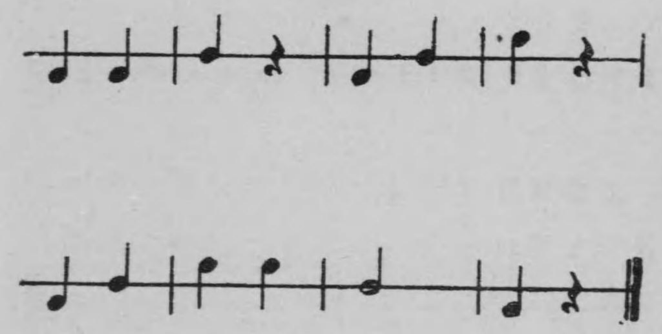
25番**26**番**19**番等、皆此の方法を採つたのである。

三度音程　簡易なる三度音程を交へて、音程を味はふ上にも、少しく巾を廣げたのである。

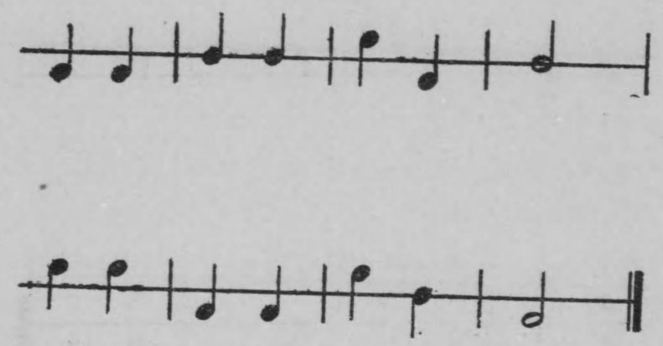
24甲



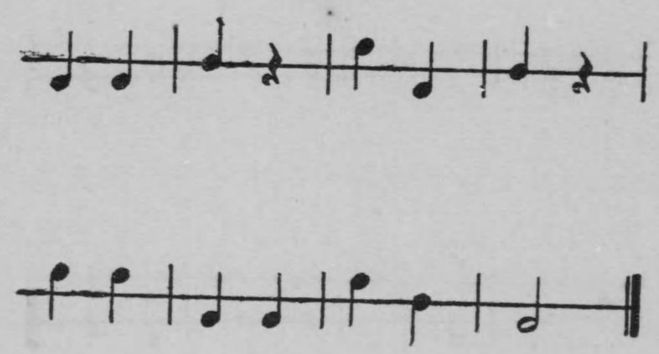
24乙



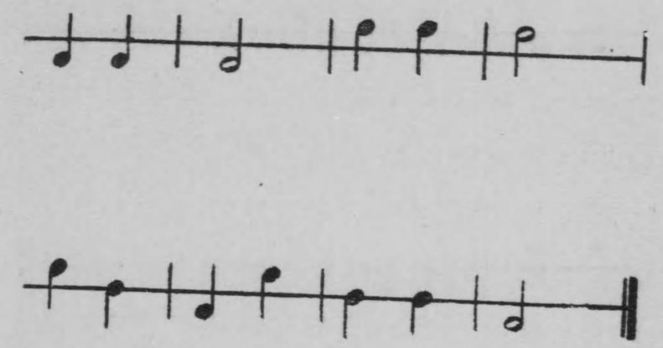
25甲



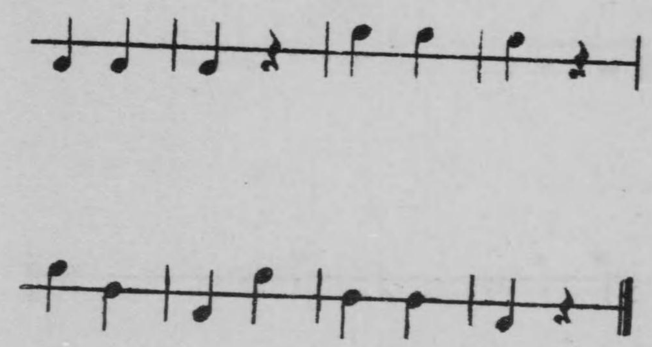
25乙



26甲



26乙



二　線

一本の線に於ての稽古は此の位にして、二本の線を用ふる事とする。今迄は　ドレミの三音間に限られてゐたのであるが、二本となれば、ドレミファソの五つの音を取扱ふ事が出來るから、前にくらべると、よほど面白くなつて來たわけである。併し、これをおもしろく稽古すると否とは、全く教師の仕向け方一つにあるのであるから、相當に工夫を凝らして、成るべく兒童を働かせて、ウマク指導して頂きたい。

早速出て來る音が、音階の第四音即ちファであるが、こゝでは、ヤレ半音だの、こゝは音程がむづかしいのと、云ふやうな、やかましい事は云はないで、むづかしい所は、教師の方で手傳つて、むづかしくなく教へるのである。

ファ　ミ　の間は、音階上大切なる半音の位置で、又此の半音程を味はふ事は、忽がせにしてはならない事であるが、こゝでは、譜を讀む稽古を先きにして　音程の方は、後まはしにする關係から、アッサリ行くべきである。

第四音

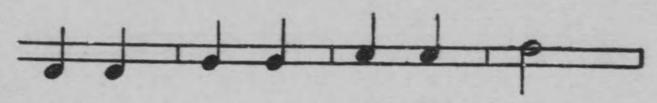
二線に於ては、第五音迄取扱ふ事が出來るのであるが、暫くの間は、第四音迄の稽古に止めて置く。

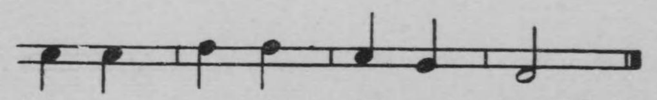
高低の巾が廣くなつたので、飛び離れた音程が出ると、讀むにも唱ふにも困難であるから、初めは、成るべく簡單な音程で、やさしい曲節、然も二度接續したものゝみを取つて例題としたのである。

例に依つて、相當の說話をなし例題に

依つて稽古する。

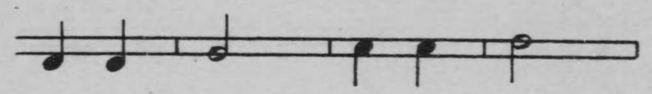
27甲

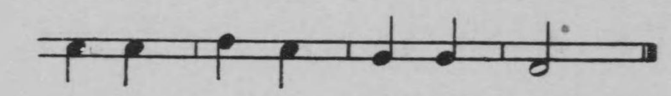




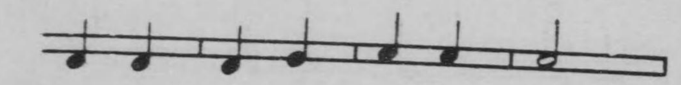
(ヘ調又は卜調で唱ふ以下之れに準ず)

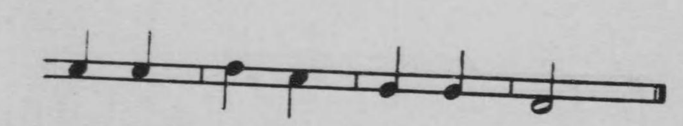
27乙



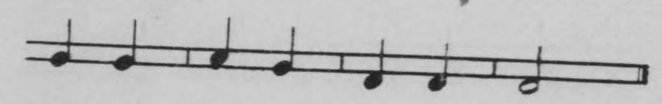


28

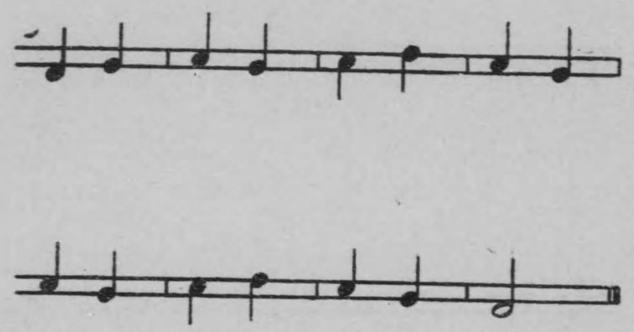




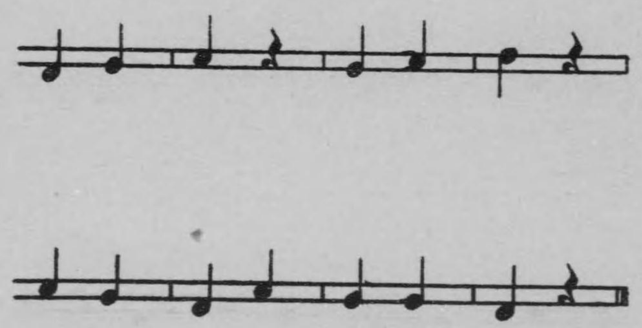
29



30



31

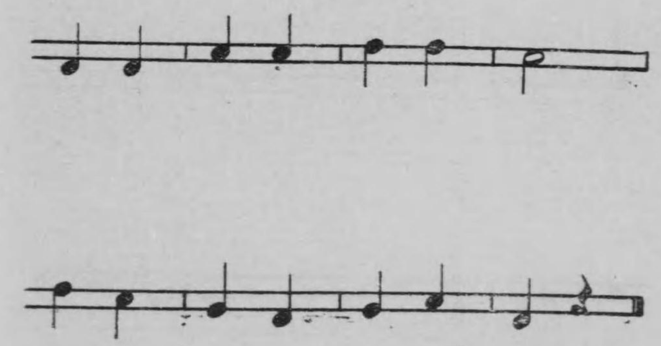


二線になつてから、二度接續の曲節ばかりであつたが、ほゞ了解した事と見て、簡易な三度を加味して稽古する。

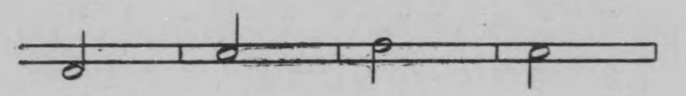
第３２番甲第一小節から第二小節に行く三度は、リヅムの工合からチョットむづかしいかも知れないが、音程練習を兼ねて試むるのである。

第３２番の乙は、甲の前四小節を二分音符續きとしたゞけである。

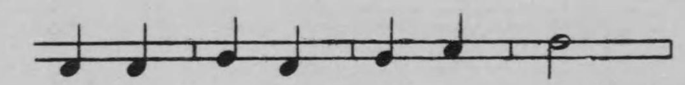
32甲

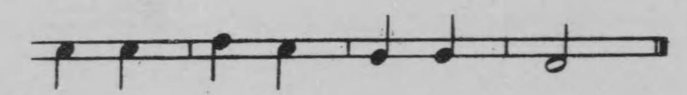


32ㄗ



33



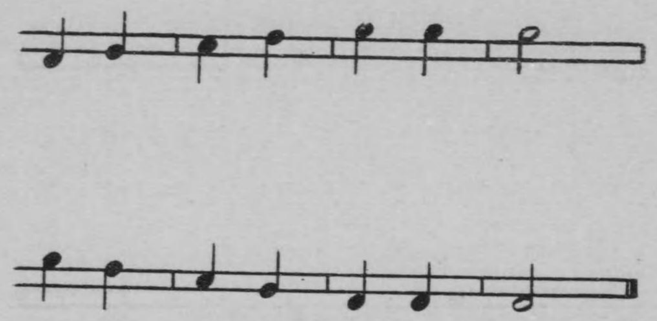


第五音

第四音迄の取扱は此の位にして、第五音 **ソ** を加へて稽古する。**ド**より**ソ**迄の五音を取扱ふ事になると、相當に巾のある音程が出來るので、指導の方法宜しきを得たならば、可なりおもしろく稽古することが出來ると思ふ。

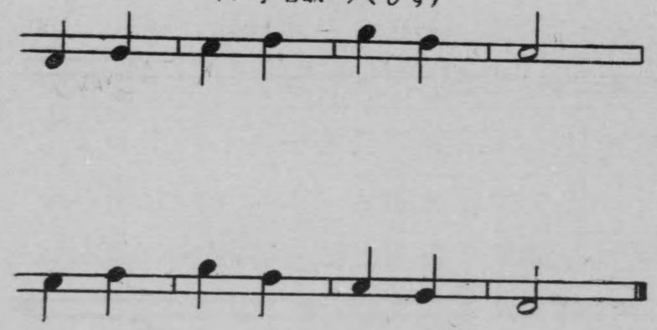
第五音提出　今日の**樂譜**には新らしい音のあることを話し、鞭を以て調べさせたならば、兒童は直に **ソ** の新らしく加へられた事を發見するに相違ない。**ソ**は**ド**より數へて、何番目の音なるか、高低の樣子は、等の問答をなし、**ドレミファソ**の五つの音を稽古するに至つた喜びを談じ、簡單に說明を加へ、順次例題に依つて稽古する。

34

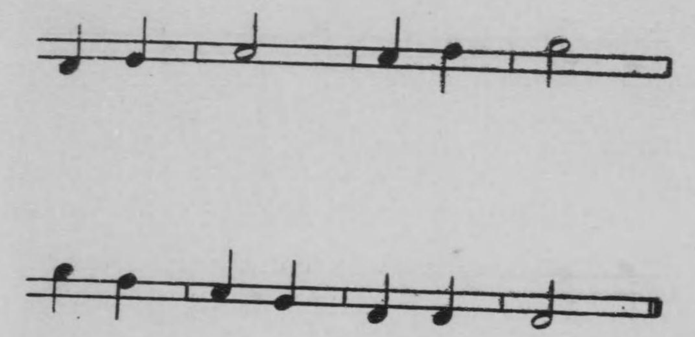


35

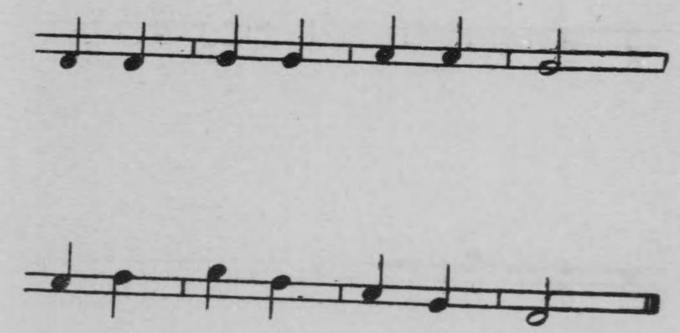
(小學唱歌　うぐひす)



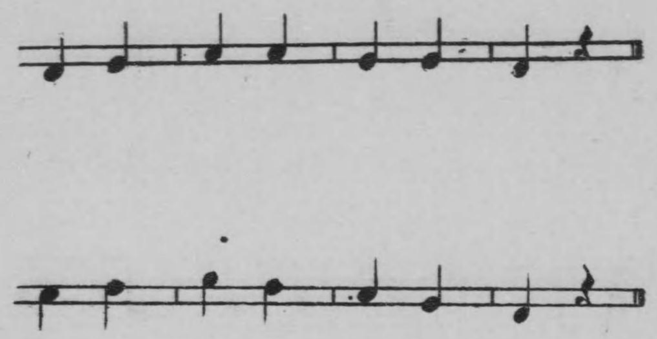
36



37



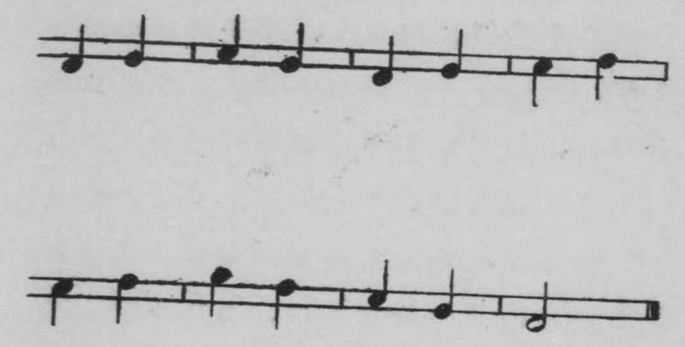
38



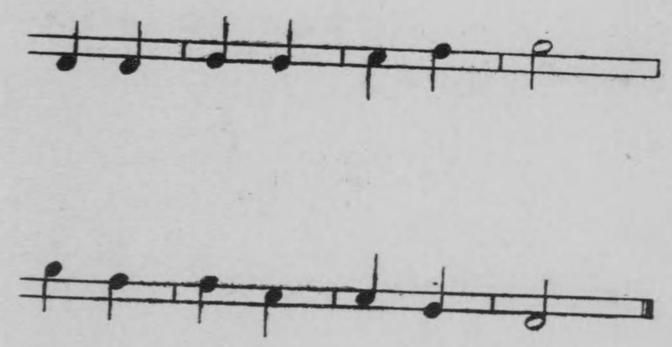
39

(小學唱歌集がほりにさらるるの一節)

40



41



拍子上の注意

何れの曲節に於ても、**拍子**は肝**心**であるが、此の**4 1**番の如き曲節を取扱ふ場合には、特に**二拍子**の**强弱**に注意すべきである。即ち第六小節の**ファ** 第七小節の**ミ** の如き、第一拍の强聲部にあるのであるから、其の心持ちで、チヨット勢をつけて唱へば、苦もなく唱ひ得らるゝものを、教師の不用意から、稍もすると苦るしむことがある。

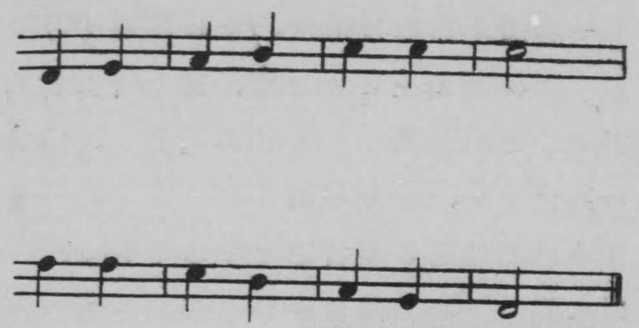
これは、チヨットした事のやうで、中々大切な注意事項である。

三 線

一線より二線に進み、爰に三線となつたので、譜面上に於ては、第七音迄排列することが出來る。併し第七音は、導音の關係から、當分取扱はないことにして、專ら第六音迄の稽古をなすのである。

例に依つて、三線に至つた喜びを述べ、適宜說話の上、例題に依つて進むことゝする。

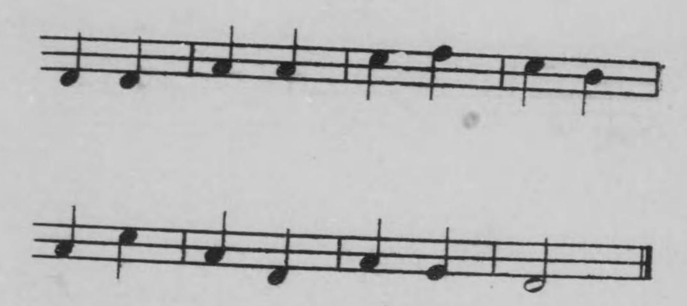
42



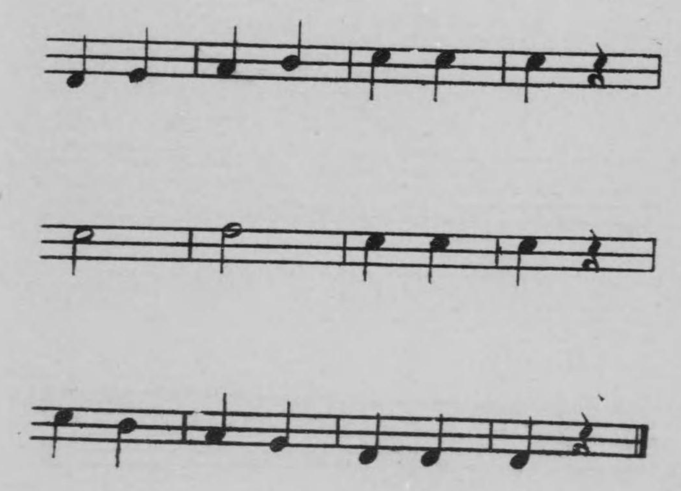
(ホ調又はヘ調で唱ふ以下之れに準ず)

43

44

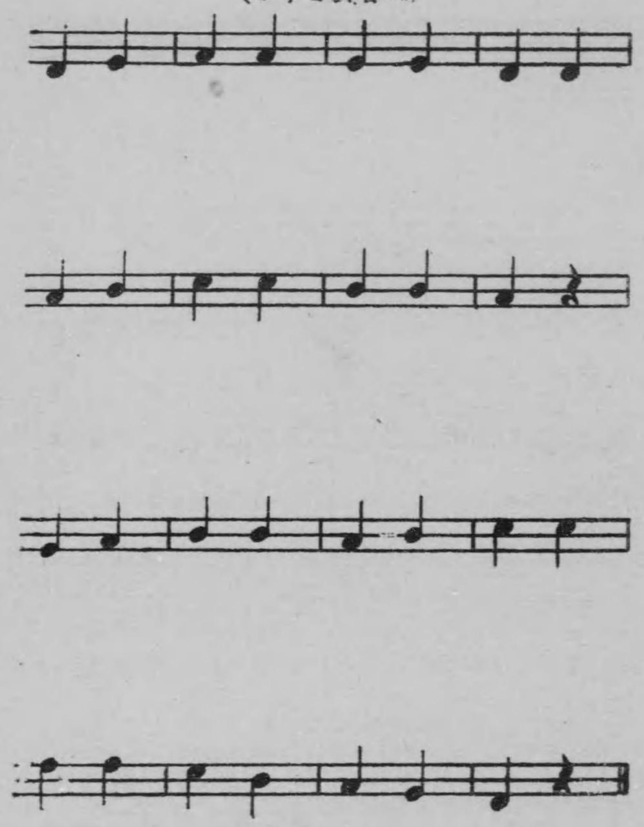


45



46

（小學唱歌春風）



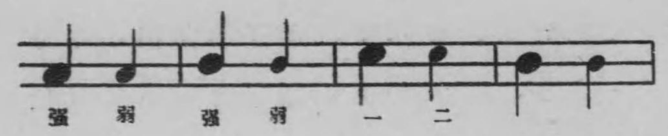
四拍子

これ迄は、すべて二拍子の曲節のみであつたが、これから四拍子を交へて教授する。

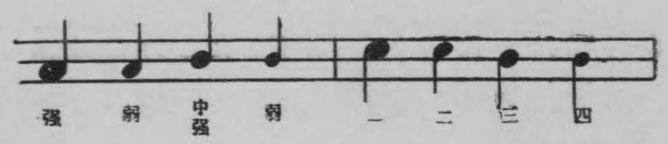
今迄は、♩この音符二つ宛に仕切りをして、すべて**二拍子**であつたが、これからは、一仕切り（一小節）にこの音符四つ又は、それと同じ時間を保つ長い音符を配置して稽古することを話し、これを**四拍子**と云ふて、一仕切の拍子を一二三四と、四つに數へて取るべきものなることを知らしむ。

四拍子の性質　即ち小節内の强弱については、二拍子の重なつたものと、ほゞ同様であるが、强弱の様子が次の通りになるのである、と云ふだけにして、理論的の説明は、高學年に讓る事とする。

二拍子



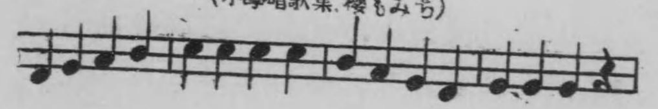
四拍子



四拍子の樂曲　**47**番を提示して、これ迄の樂譜と異つた所のある事を述べ、調査せしむ。兒童は直に、一仕切りに、音符が四つ宛配置されたことを發見するであらう。そこで、四拍子に關する適當の說話をなし例題に依つて進む。

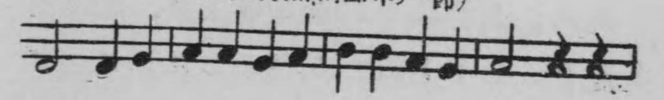
47

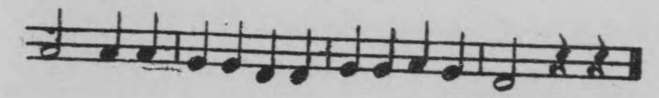
(小學唱歌集.櫻もみぢ)



48

(小學唱歌集.隅田川の一節)





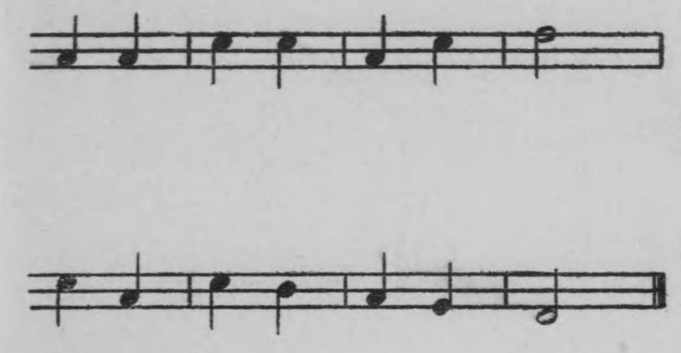
(休止符二個續いて表る)

主調音以外の音より起る曲節

これ迄の樂曲は、すべて主調音即ちドより始まつた曲節のみであつたが、樂曲は、いつも主音より起るものではないのである。依つて、主調音以外の音より起る曲節の練習を交へる事とする。

最初第三音より起る曲節を取扱ふ、同時に三度音程を交へる。これ迄の曲節にも簡易な三度音程は、ちょいちょい交へたのであるが、これからは、長三度・短三度共に遠慮なく用ふる事とし、猶四度五度の音程をも加へる事とした。これは曲節に變化を與ふると同時に、音程の稽古である。

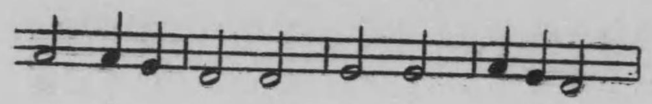
49



休止符の二つ並んである曲　48番の第四小節、50番最後の小節には、休止符が二つ並んで現はれて居る。こゝは、三四と二つ拍つだけ休むのであることを敎へ、更に51番に於て同樣の練習をなす。

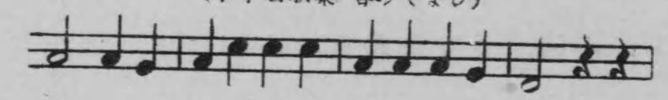
50

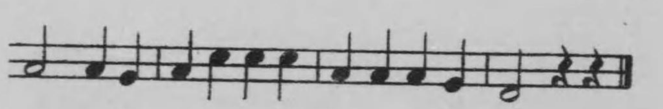
(小學唱歌集、見わたせば)



51

(小學唱歌集 春のやよひ)





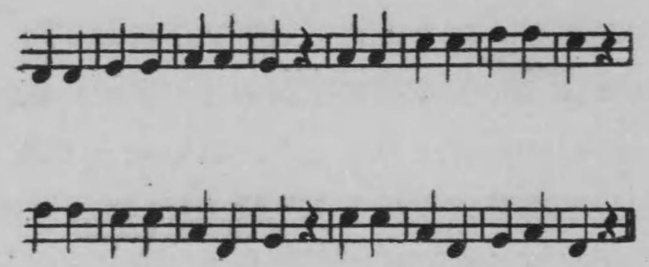
進度の考察　これ迄の稽古に於て、音程に對する實力は、どれくらゐ進んだか、讀譜の狀況は、豫期の通り進み得たか、此**50**番　**51**番等を如何なる程度に味はつたか、等を觀察して、其の樣子で進度を鹽梅するのである。骨が折れさうであつたならば、更に此程度で、成るべく歌曲風の音程を編んで、適當に練習を重ねるのである。

其の一例

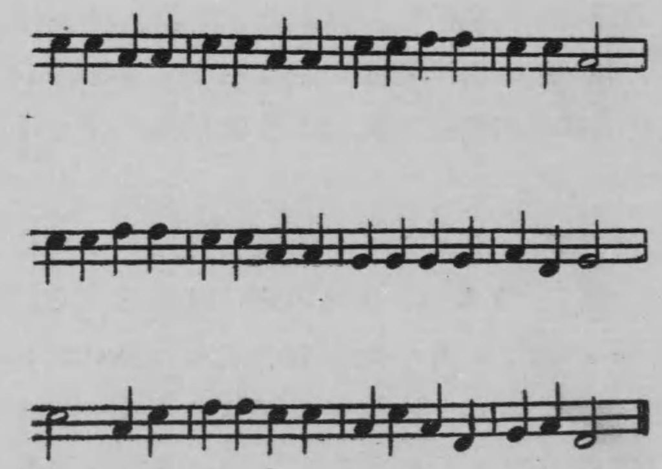
日の丸の旗　**朝顏**　兒童に親しみ深い、此の種の樂曲を提示して、吟味研究しつつ稽古する。

初めは、何の曲だかわからないが、唱つて行くうちに、漸次樣子がわかつて、ハハァー　日の丸の旗の譜、と　うなづく所に興味も起り、又相當功果を收め得るのである。

52



53



52番の日の丸の旗　53番の朝顔　共に兒童の親しみ深い歌曲であるから、易々と出來るに相違ない。其の出來映えに對し、相當に賞詞を與へて、奮發心を起さしむる。

此の種の作業中、注意すべき事は**速度**である。音符の音長を正確ならしめんと心配するの餘り、緩除に流れ過ぎて、兒童の疲勞(イヤ氣?)を招くことがあつてはならない。ドチラかと云へば早い方がよいと思ふ。勿論初めから早くするのではないが、階名をほゞ讀み得るやうになつて、唱ふ段になつた時には、相當に早く唱つて、勢をつけて練習した方がよい。

此の**朝顔**の如き、讀譜の關係から、便宜上、四分の四拍子の形ちに書いたのではあるが、御承知の通り、八分音符本位の二拍子であるから、曲の本性を失は

ないやうに、其の邊は、要領よくウマク取扱ふのである。

帶(タイ)とスラー

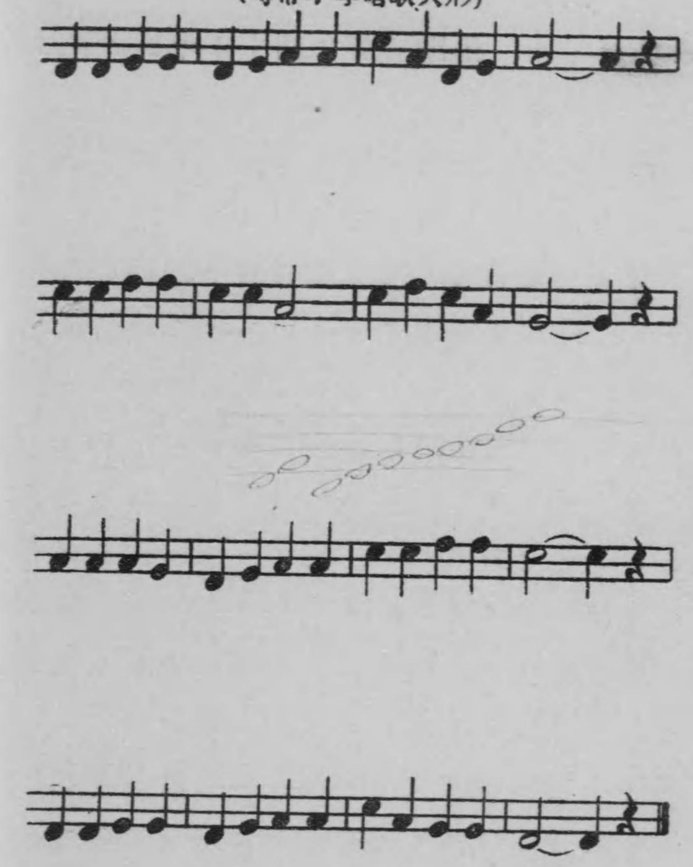
帶　同じ高さの二つの音符に ‿ この記號が附いてゐるときは、階名を別々に唱はないで、一つの長い音符のやうに唱ふべきものであることを知らしむる。

スラー　異つた高さの、いくつかの音符に ‿ この記號が附けられたときは、其の弧線内の音を、滑かに唱ふ記號となることを知らしむ。

但し、こゝでは、混同の恐れがあるから、帶の方だけを教へて、**スラー**に關する事は預つて置いて、他日適當の時機を見て教授する方がよい。

54

(尋常小學唱歌人形)



54番 同じく親しみ深い人形の曲である。此曲の第四小節に於て、帶の事を會得せしめ、附點音符に關する準備をするのである。

例の通り、全曲を吟味せしむる時は、第四小節の帶を發見するであらう。

♩この音符と ♩この音符と、同じ高さで、並んでゐるときに、‿この記號が附いたときには、**ミーミ**と唱はないで、**ミ——**と、三拍分延ばして唱ふのであること、**レ ソ ド**何れの音でも、同じであることを知らしめ、更に一二回念を入れて練習する。

此の場合に、教師は、各段の第四小節を、一二三四と唱(とな)へ、又は、鞭を以て指す等、適宜の方法を以て、其の音長の樣子を充分に會得せしむる事に努むるのである。

主音の位置變更

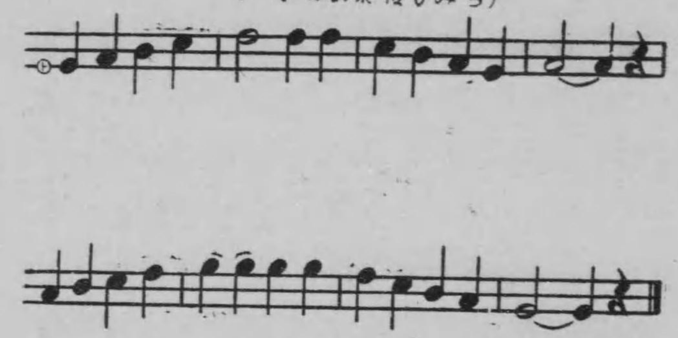
第一線を主音とする

これ迄は、第一線の下の空間を**ド**として稽古したのであるが、相應に高低の樣子も會得したので、順次主音の位置を變更して、讀譜の練習をなす。

唱歌に用ふる樂譜は、其調子に依つて、主音の位置が異るもので、いつでも此所が（第一線の下の空間）**ド**と、きまつてゐるのではない。其曲の調子に依つて、こゝ(第一線)が **ド**になつたり、こゝ(第一の間)が **ド**になることもある。今日からは、こゝ(第一線)を **ド**とした調子の稽古を始める、と平易に說明して例題に依つて進むのである。

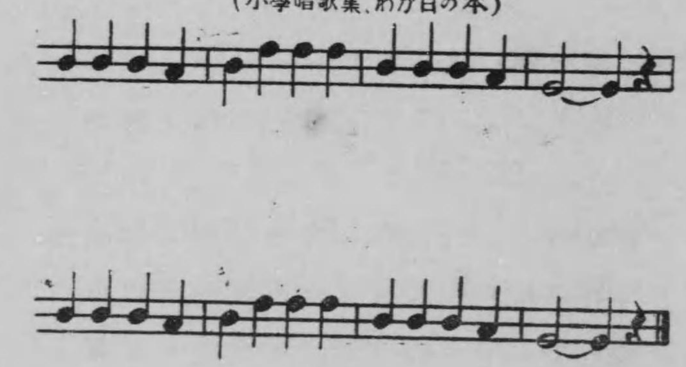
55

(小學唱歌集 櫻もみぢ)



56

(小學唱歌集、わが日の本)



55番　56番　共に既習の樂曲である。特に此の曲節を提出したのは、主音の位置變更である、この變更は兒童に取つて、可なりの苦痛である。依つて、成るべく苦勞なしに唱ひ得られるやうに、との教師の深切である。既習の樂曲であるから、苦もなく讀み、且つ唱ひ得るに違ひない。從つて、位置變更恐るるに足らずと歡迎するであらう。

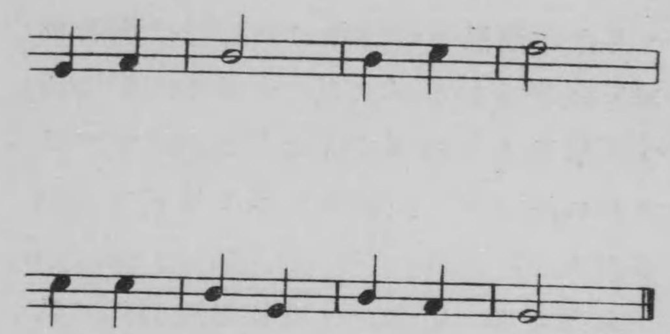
先づ當分の内は、音の動きの尠い、簡單な譜で、讀むにも、唱ふにもあまりむづかしくない曲節を選び、先きに唱つたことのある數曲を、適當に交へて練習するのである。

爰に於て　注意する事は、樂譜を教授する事は、やがて完全なる視唱法に依つて、充分に唱ひ得る完力を養はんが爲である以上、簡單なる既習の曲節とは云へ

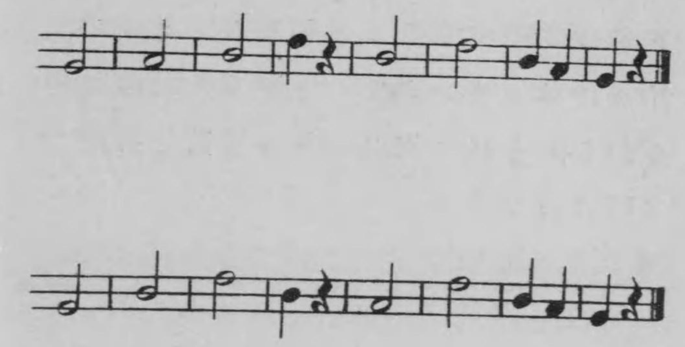
其の取り扱ふ事が、無駄骨折りに終つてはならない。音程・音長・拍子、等何れも先きに取扱つた時よりはズット良い成績で、兒童自身に於ても、前に唱つた時よりは、よく出來たと、悟らしむるやう仕向けて、相當の功果を收めて進みたいのである。

音程練習は、必ずしも、三度・四度・六度と云ふ、むづかしいものでなければ、功果のない、と云ふものではない。自分の經驗に依ると、高學年に至つても、すぐ隣りの音、卽ち二度の音程を、正確に唱ふと云ふ事は、努むべき最も必要のことで、絕えず練習すべきものであると思ふ。とは云ふものゝ、三度・四度の音程を練習する必要なし、と云ふのではない。其の邊は、誤解の無いやうに願ひたい。

57



58



主音の位置交互練習

主音の位置を第一線に移して、ホ調格としたのであるが、これが爲め、前に習つたニ調格を忘れてはならない、依つて前のニ調格を、適當に交へて練習するのである。

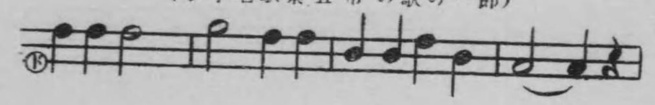
爰に於て、兒童と一つの約束をして置くのである。

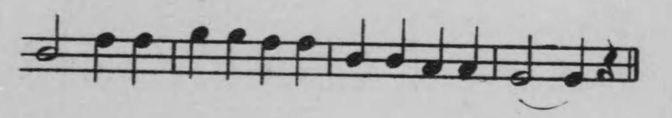
これからは、こゝ(第一線)を ド として唱ふこともあり、こゝ(第一線下の空間)をドとして稽古することもある。それで、始めに赤いチョークで、Ⓓ斯う云ふ印をするから、それに依つてドの位置を判斷して唱ふのである。

60

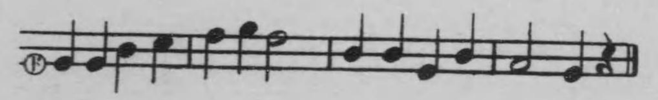
61

(小學唱歌集五常の歌の一節)



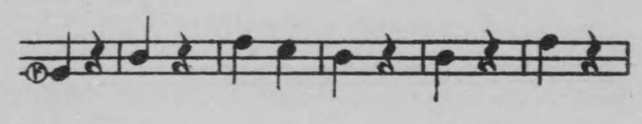


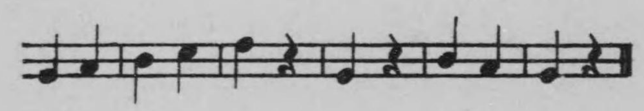
62



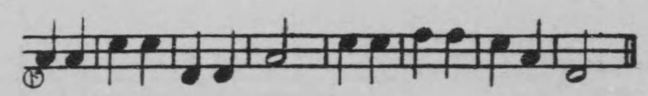
63

64

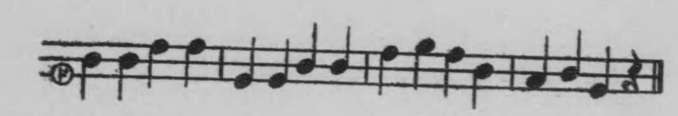




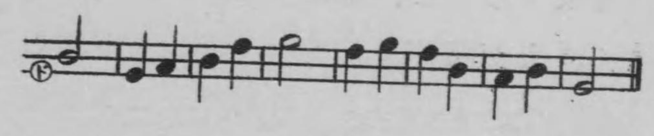
65



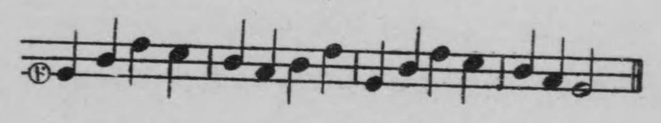
66



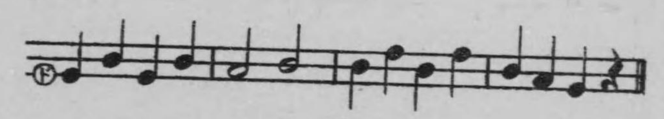
67



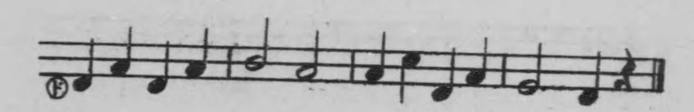
68



69



70



四　線

更に一線を加へて、四線となし、第七音第八音を提出する。

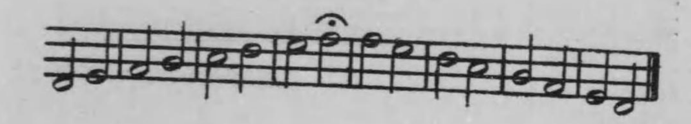
四線となれば、高低の巾は、九度を數ふることが出來る。從つて**ド**より**ド**迄のオクターブを、らくに排列することが出來るやうになつた、爰に於て、先づ其の喜びを談じ、快感を起さしむ。

四線に於ては、可なりの樂曲を取扱ふことは、勿論出來るのであるが、前にも述べた通り、音程練習を主眼として、讀譜の練習をするのであるから、曲節は、同じく簡單な四分音符本位としてある。此の**四線**に於て力めたい事は、**線**と**間**とを充分運用して、讀譜と同時に、**調子**　**拍子**　等、出來得る限り、確かに唱つて進みたいのである。

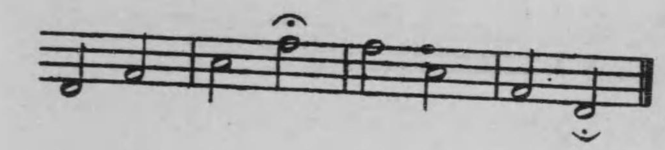
延長記號

𝄐　この記號の附けられた音符は、特別に延ばして唱ふのであることを知らしむ。

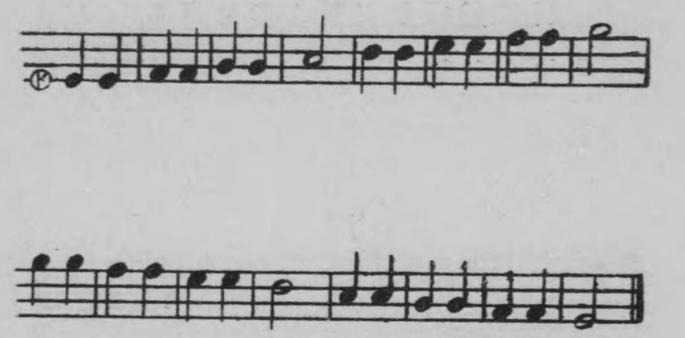
71



72

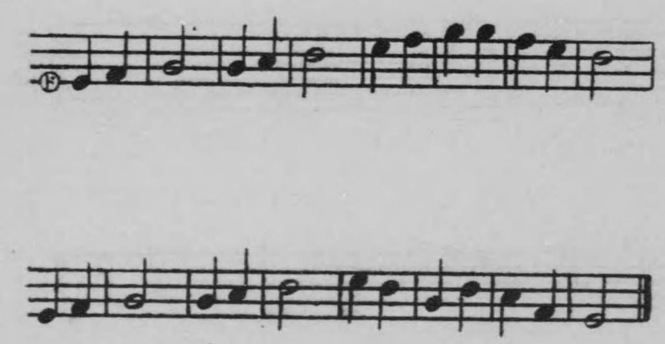


73

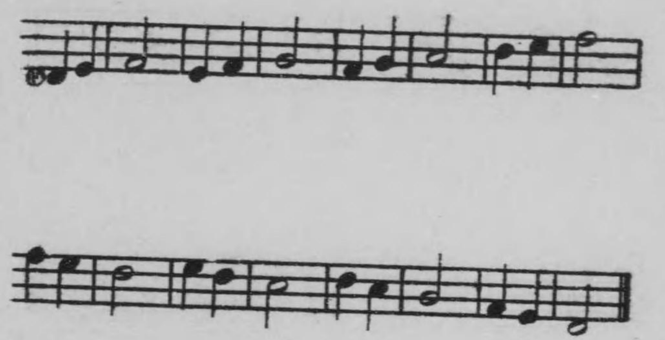


(二調ベ唱ふル仕方之れに準ず)

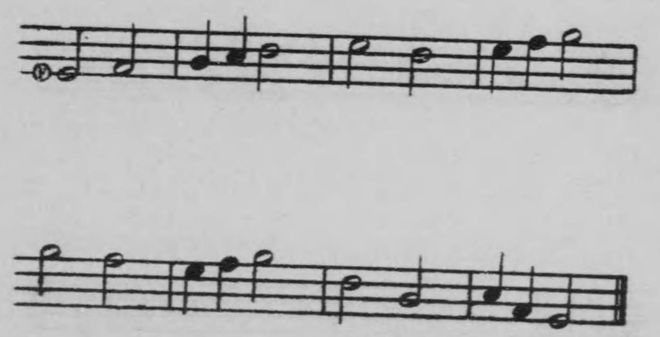
74



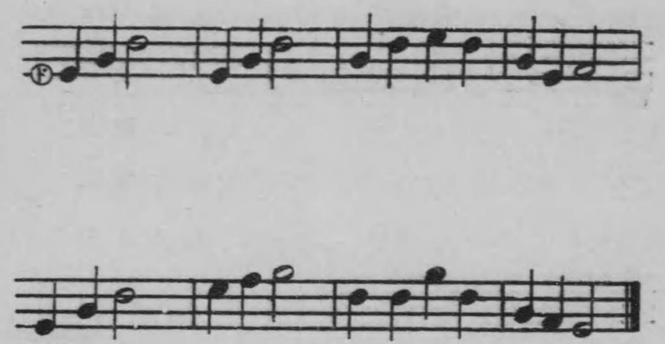
75



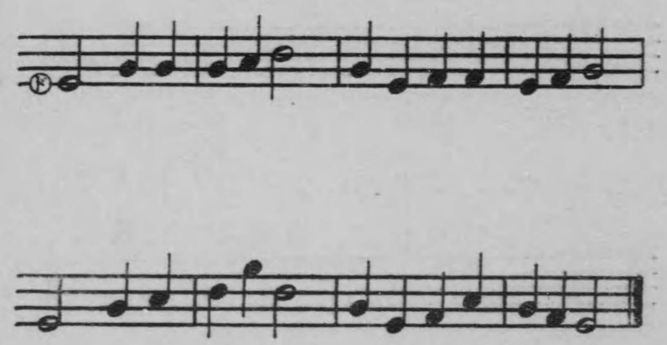
76



77



78



五　線

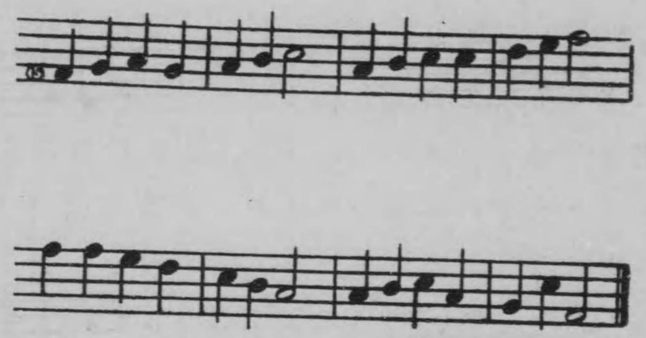
累道して愈々五線となつた。五線となれば、上下の空間を合せると、十一度を使用し得られる。これより、主音の位置を　上又下に移動して、更に低音を交へる事になる。さうすれば、音の動きも自由となるから、これ迄にくらべると、よほど、味のある稽古が出來るやうになつたわけである。

第一の間を主音とする

五線になると同時に、主音の位置を第一の間に移して稽古する。

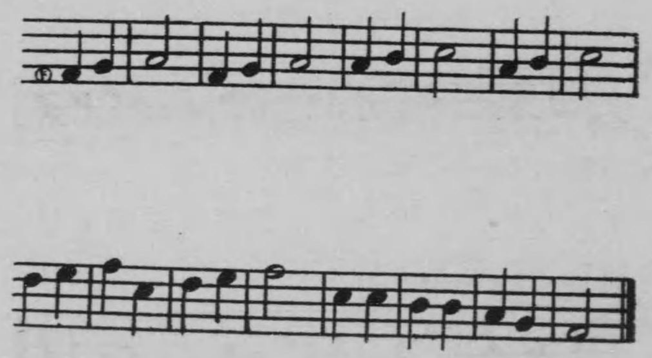
例に依つて、最初は、既習の音程とほぼ同程度の曲節を用ひ、漸次上下に延ばすことゝした。

79

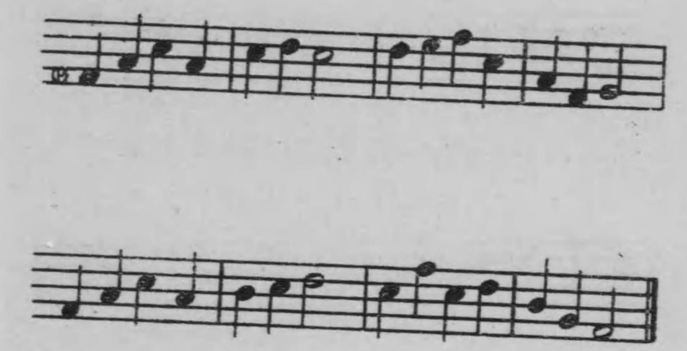


(二調ノ唱ふ以下之れに準ず)

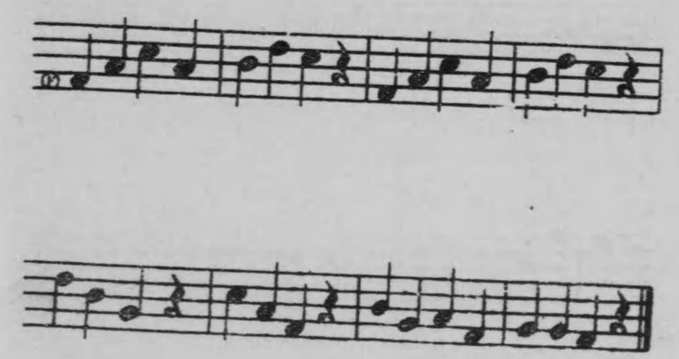
80



81

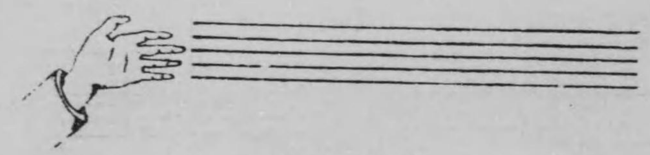


82



五指の運用

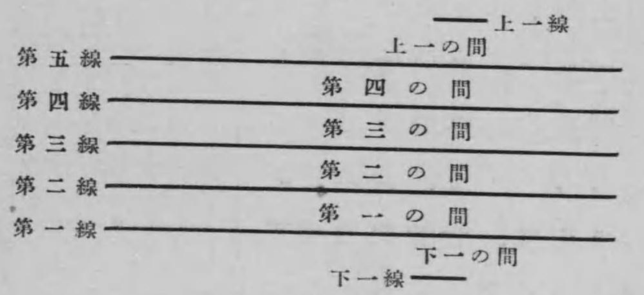
自然の賜物　左手の五指を、**譜表**に應用して稽古することは、至極簡便で、然も説明、問答等の場合に、頗る便利である。よろしく教師も之を使用し、兒童にも熾んに使用せしめて、此の賜物を**用運**することを、切にお勸めする次第である。



譜　表

譜は　**五線**ときまつて居るのであるが、この五線で足りない時には、上にも、下にも、更に短い線を附け加へて、用ふるものである。此の線を**加線**と云ふ。

五線　幷に　線と線との間は、すべて下から上に數ふものであつて、其位置の名稱は、斯うである。と知らしむる。



高音と低音

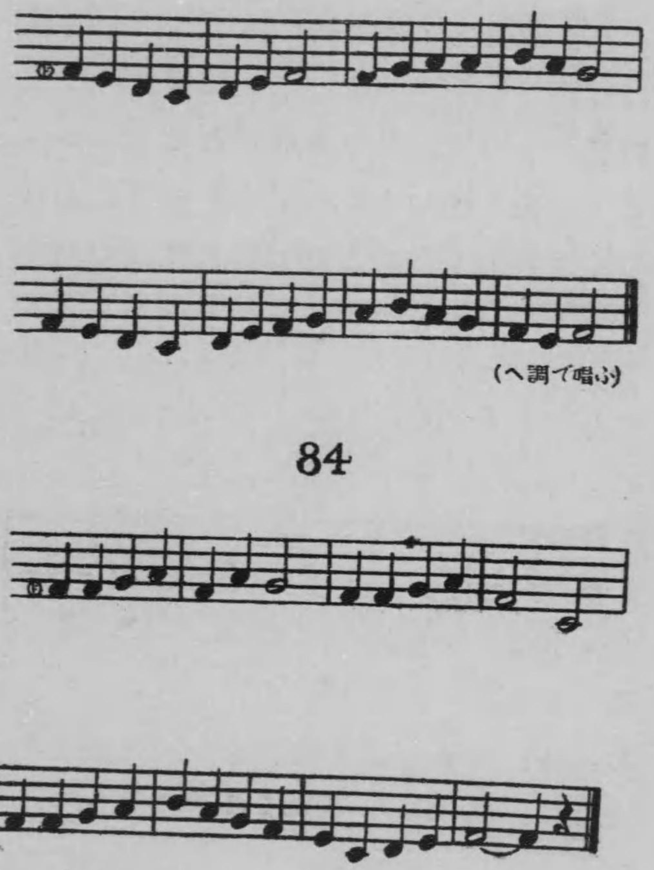
高音・低音に關する事は、音階圖に依

つて説明するが一番わかり易いと思ふ。

此時分には、音階のことは最早會得し、又相應に練習も積んで居るであらう。

これ迄は、ドよりド迄の一音階の間に於てのみ、練習したのであるが、この上のドより更に **レミファ**……と、高い音のあると同様に、低い方にも **シラソ**……と、云ふ音がある事は、音階圖の示す通りである。これから、其の高い音低い音を稽古するのである。それで、先づ低い方から稽古する事とした。

83

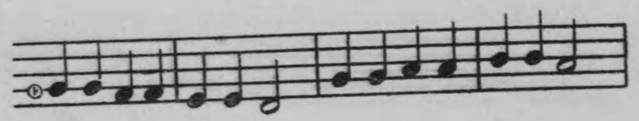


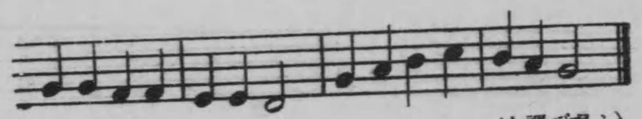
84

第二線を主音とする

主音の位置を**第二線**に移して、**ト調**格の稽古をなす。音階の中央部ば、可なり練習したので、低い方の稽古をするのである。此の低い方が、よくわかれば、高い方は苦勞なしに指導し得られるのであるから、其の方の説明は、略したことを御斷りして置く。

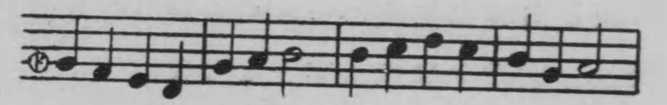
85

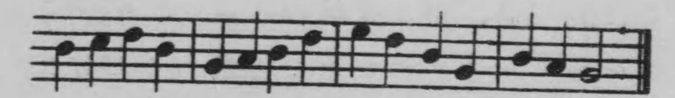




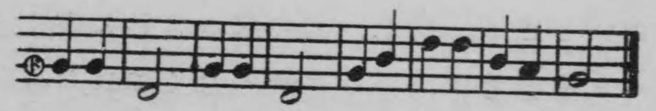
(ト調で唱ふ)

86

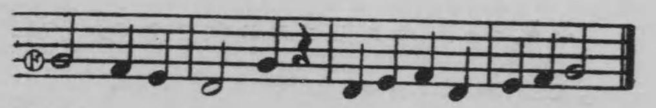




87



88



高音部記號

愈々高音部記號(ト字記號)を表はして、完全な樂譜を取扱ふ事となつた。

樂譜は　五線の始めに必ず 𝄞 この記號を書くものであることを知らしむ。ここに於ては、單に五線の左端に、必ずこれを書くべきものであると敎へるだけに止め、其の理論に關する事は、後日適當の時機に於て授ける事とする。從つて、音部記號の名稱等は、此際敎へなくてもよいと思ふ。併し、其の書き方幷に書くべき位置等は、確かに敎へなくてはならない。

第二線より書き始め、第三線と第一線との間に於て圓を畫き、第四線に於て結ぶべきこと、等ねんごろに敎授する。

調子記號

調子は　イロハニホヘトの七つである。そして、其のうちのハ調には、別段記號を用ひないが、外の調は ♯これと ♭これと二種あつて、樂曲の始めに記して、其の調子を示すものであることを知らしむ。

此場合に、譜表に音名を排置して、其の調の依つて來るべき理論を說明することは、深切のやうであるが、自分は、此場合それらの理論は、一切預かつて置いて、六學年に至つて、適當な時機を見て說明を加へ、會得せしむるこゝとして、こゝでは單に　♯一つはト調　♭一つはヘ調と云ふ取扱ひで進んだ方がよいと思ふ。

拍子と拍子記號

吾人が、話をするにも、自然に強い所と弱い所、勢の附く語と附かない語、とあるやうに、樂曲の進行には、必ず、一定の形式に依つた强弱が現はれて行くべきものである。これを拍子と云ふのである。

强聲部と**弱聲部**　樂曲の進行中に於て、語勢の存する箇所を**强聲部**と云ひ、其の他の箇所を**弱聲部**と云ふ。

これ等の理論に關する事は、實際について、漸次に會得せしむるやう指導するのである。

拍子記號　ト字記號·調子記號の次に、分數の形式に依つて表はしたものが、**拍子**の記號である。其の分母は　音符の種類を示し、分子は音符の數　即ち拍數を

示すのである。

ハ　調

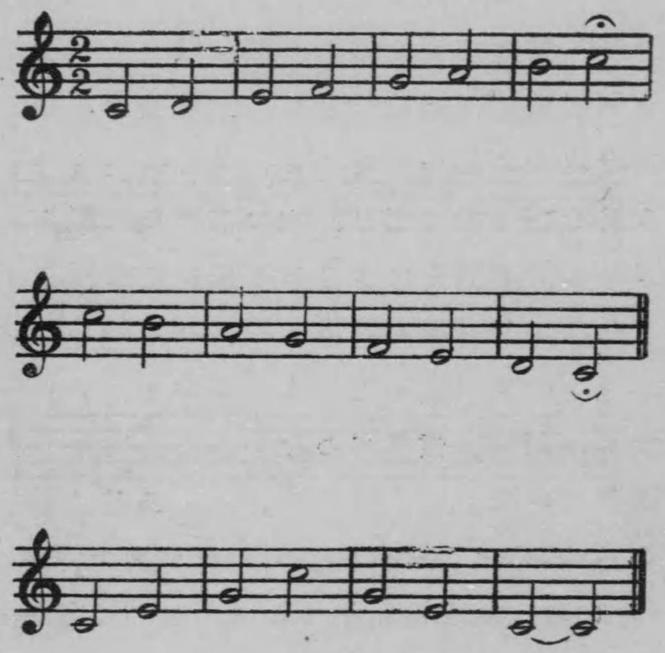
下一線を**主音**とした**ハ調**を敎へる。

音部記號·拍子記號の整つた、完全なる樂譜を取扱ふ第一歩である。先づ音階と三和音を讀み且つ唱ひ、次に君が代の譜を示して、讀譜をなさしむ。君が代は、よく知つて居る曲ではあるが、譜を讀むとなると、案外讀めないものである。殊に此の**ハ調**は、慣れてゐないのであるから、最初の時間には、ごくアッサリ二小節ぐらゐに止めて、あとは次の時間に讓つて、ゆるゆる練習する方がよい。

君が代は、我國の國歌であるから、此樂譜は適當の時間に於て充分說明を加へ練習を積んで、階名を暗誦し得る程度迄

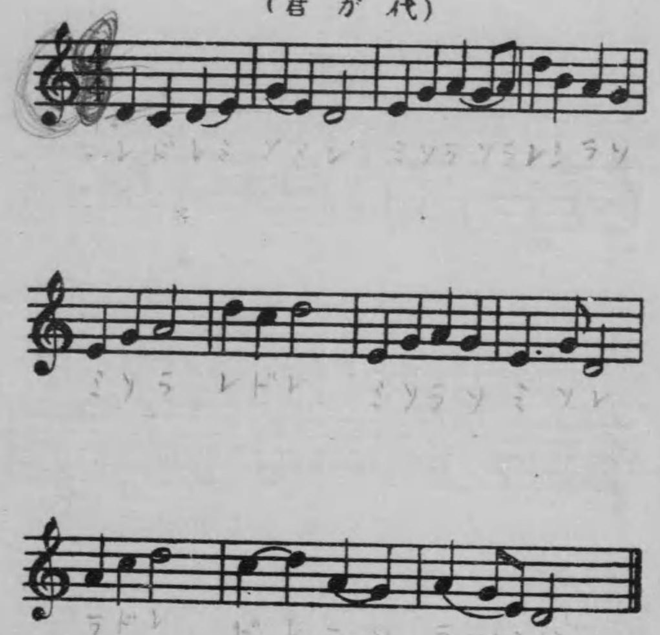
進めたいと思ふ

89



90

（君　が　代）

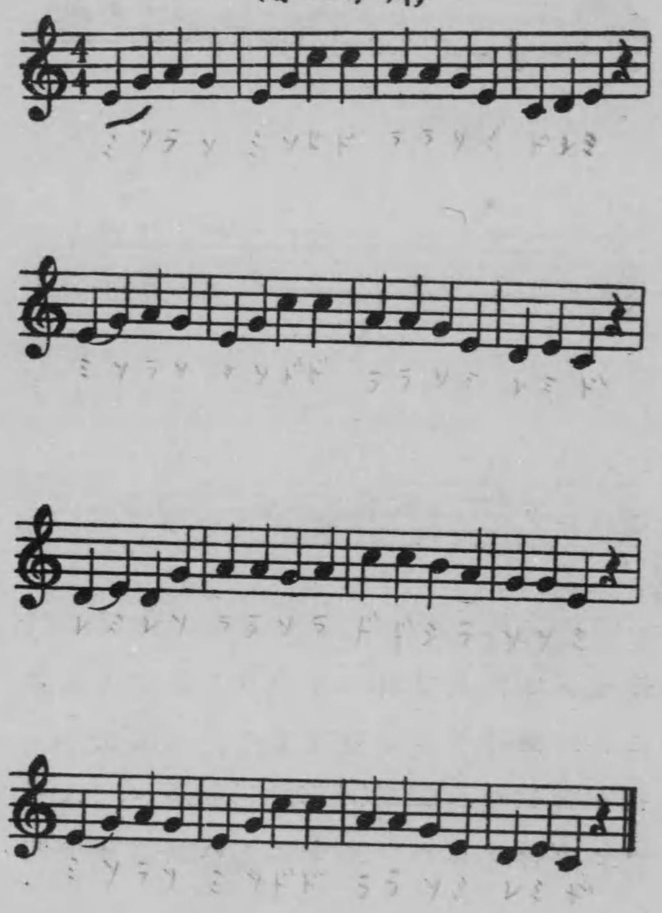


春の小川　兒童に親しみ深い曲で、四分音符ばかりで出來てゐる。從つて說明には至極都合のよい曲である。此曲で、拍子を數へ、强弱(小節內の)を調べ、**スラー**を會得せしめ、完全なる**ハ**調四分の四

拍子の様子を知らしむるのである。

91

(春の小川)



ニ調

調子記號に嬰二個を表はし、下一の間を主調音とした　ニ調を教授する。

此の時に♯は嬰記號であるとか、シャープとも云ふ　等の事は、教へなくてよい。單に♯斯う云ふ記號が二つある調子はニ調である。ニ調は下一の間をドとして唱ふべきものである。と覺えさせて置けば、それでよいのである。

但し寫譜をなさしむ時には、♯を書く位置は、正しく第五線と第四の間に書くべきものたることを教へなくてはならない。これは變記號の場合も同様である。

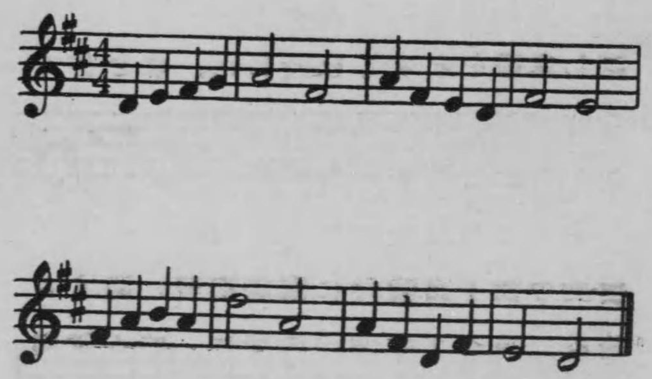
嬰·變の調子記號幷に臨時記號に關する理論は、追つて卒業迄の間に、時々説明を加へて、會得せしむるのである。

此の調子の格は、最初一線時代に習つ

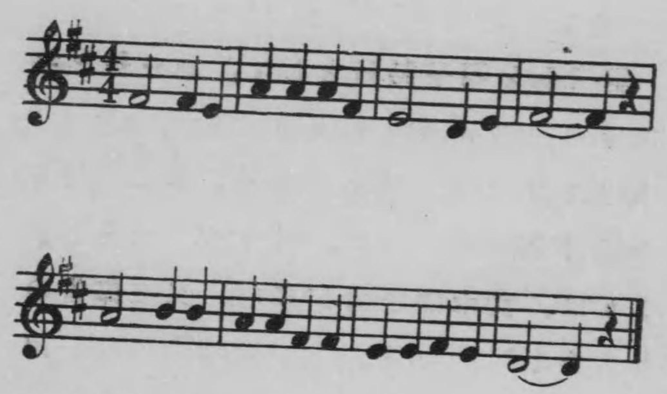
た位置と同じであるから、案外容易く唱ひ得るであらう。

ニ調は、ハ調に比べて、一音高い調子である事を、譜の位置について説明して兒童の耳に訴へ判斷せしめ、眼と耳との聯合習練に依つて、調子の樣子を了解せしむるやう力むるのである。

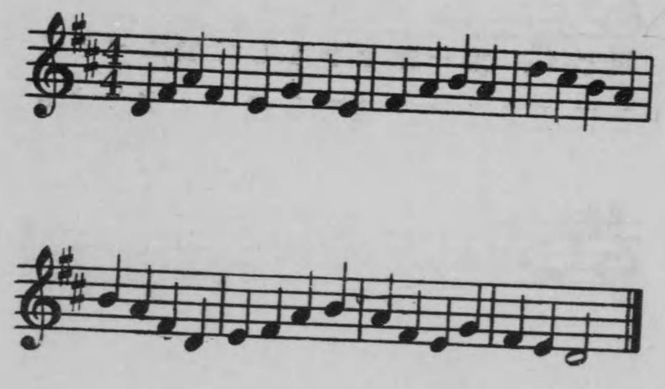
92



93



94



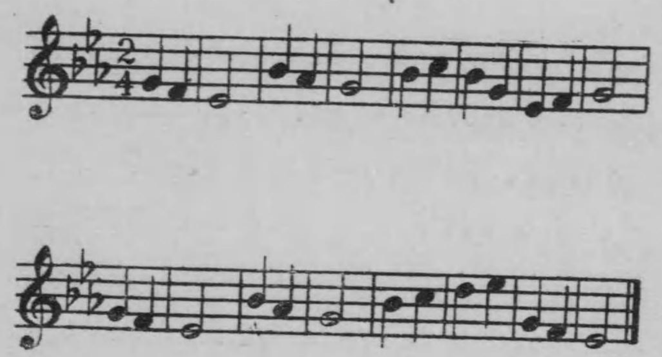
變ホ調

變三個を調子記號として、第一線を主調音とする變ホ調を教授する。

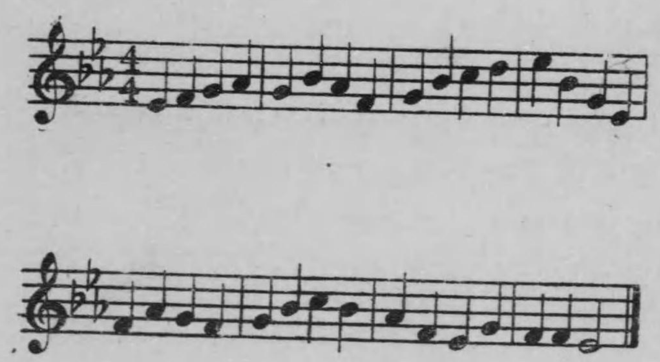
特に變ホ調を先きに選んだ事は、諸方の細目を拜見するに、何れも、ホ調の曲よりは、變ホ調の方が多い。又文部省の尋常小學唱歌を見ると、變ホ調の曲が四つあるのに、ホ調は一つもない。それらから考へて、變ホ調を先きにしたのである。

同じく、第一線をドとして唱ふべきことを得心させて、練習を進める事とする。

95



96



ヘ　調

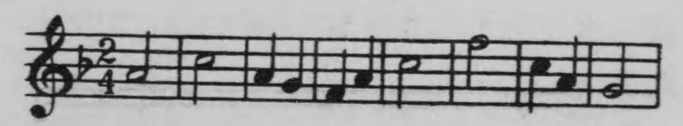
調子記號に一個の變記號を現はし、第一の間を主調音とした、ヘ調を教授する。

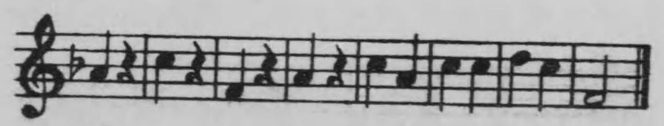
ヘ調は、尋常小學校に於て、最も多く用ひらるゝ調子である。何れの教授細目を拜見しても、此のヘ調の曲が一番多い。又文部省の尋常小學唱歌を調べて見ると、全部百二十曲のうち、ヘ調が三十三曲で、全歌曲の四の分一以上である。そこで、最も多く用ひらるゝ此の調子を利用して、或程度迄其の讀譜に慣れしめ、此の調子に於て、成るべく多くの作業を濟ませて、他の調子に移ると云ふ方法も、又一策であると思ふ。移調等の場合を考へても、ヘ調は至極都合がよい。卽ちト調のものは一音下げ、ホ調・變ホ調のものは、半音乃至一音を上げればよいのである。

又實際に於て、これくらゐの移調は、何等差支ないと信ずるのである。

これ迄の稽古に於て、視唱に關する大體の樣子は、ほゞ了解したと思ふ。これからは、樂譜について、調子・拍子を調べ、ハ調とヘ調は、どう異ふか、何れが高いか等、適當に質問應答をなし、實際に導くことに努力するのである。

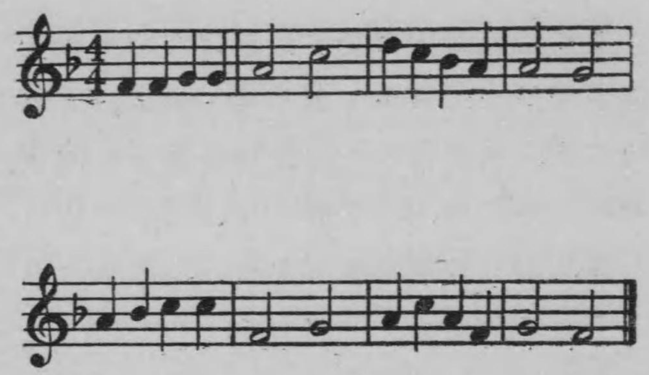
97



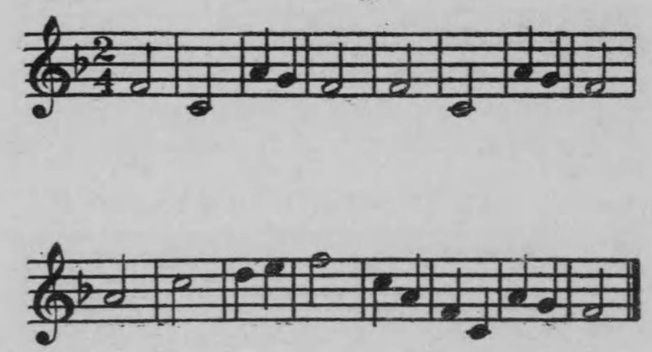


(唱ふ時には調子を下げて差支なし)

98



99



音　符

これ迄は、二分音符と四分音符のみの取扱ひで、單に**長い音符**・**短い音符**で、通して來たのであるが、こゝに於て、各**音符**の**名稱**、并に其の**關係**を教授する。

全音符　一番長い音符

二分音符　全音符を二つに分けたもの。

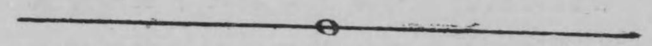
四分音符　一番長い音符を四つに分けたもので、二分音符の**半分**である。

假りに二分音符の長さを**二分**とすれば、四分音符は其の半分、即ち**一分**となるわけである。

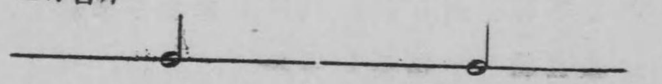
八分音符　全音符を八つに分けたものである。從つて四分音符の**半分**である。

假りに四分音符の長さを**一分間**とすれば八分音符は**半分間**となるわけである。

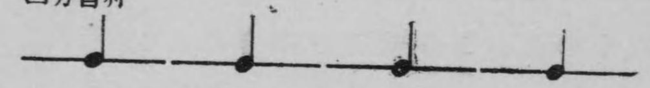
全音符



二分音符



四分音符

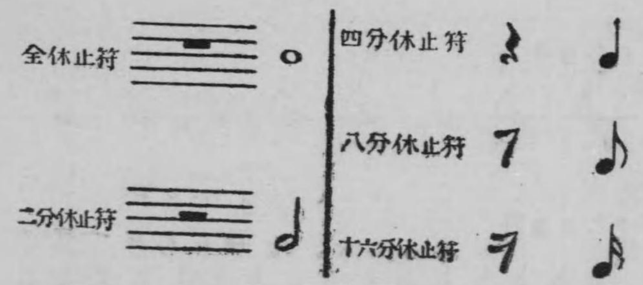


八分音符

十六分音符

休止符

樂曲の進行中**默止**する箇所を表はす記號を**休止符**と云ふ。其の休む時間の割合は、**音符**と全く同樣で、**名稱**も又**同格**であることを知らしむ。但し尋常小學校に於ては、全休止符・二分休止符等は、殆ど使はないのであるから、**四分休止符**と**八分休止符**を、しつかり敎へておけば、それでよいと思ふ。



八分音符

二分音符と**四分音符**の關係は、充分會得したと信ずるので、**八分音符**を交へての練習を始める事とする。

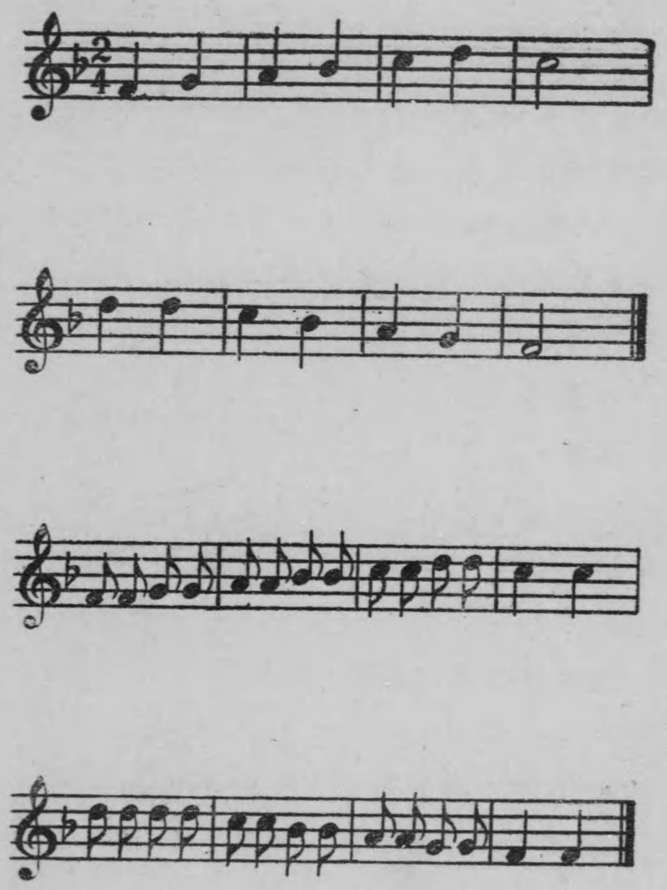
100番・101番の例題に於ては、最初四分音符本位の上の二段を唱はせ、次に下の二段を唱はしめ、八分音符と四分音符との關係を說き、音長の割合を知らしむ。

學級を二分して、一方に上の段、一方に下の段を唱はしめ、又既習歌曲の一節を取り出して說明する等、適宜の方法を講ずるのである

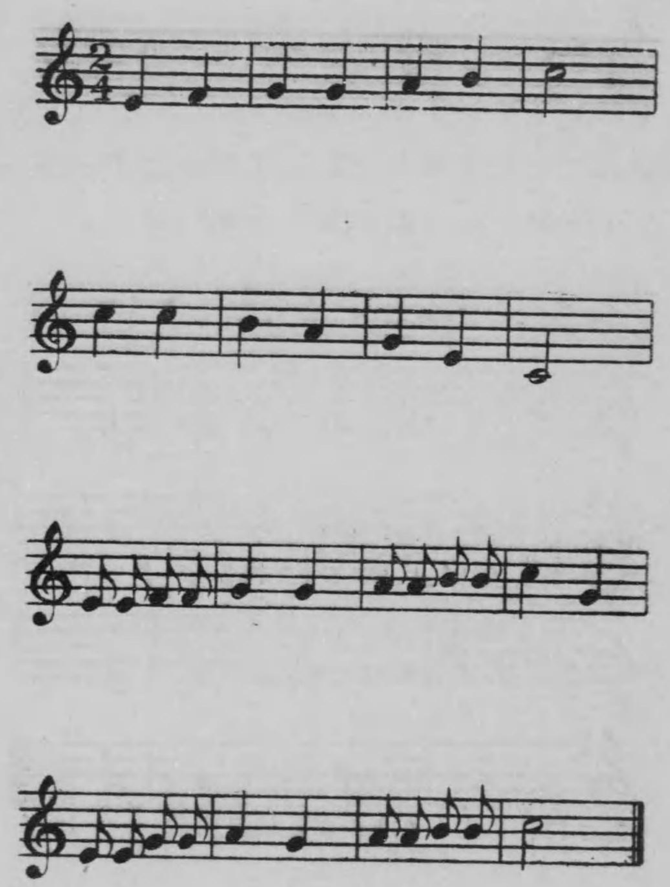
八分音符の書き方 八分音符は ♪ 斯う書くのであるが、♫ 斯う云ふ風に續けて書く事もある、を知らしめて置く。

（續けて書くときは、**スラー**を附けたものと同樣の扱ひになる）

100



101

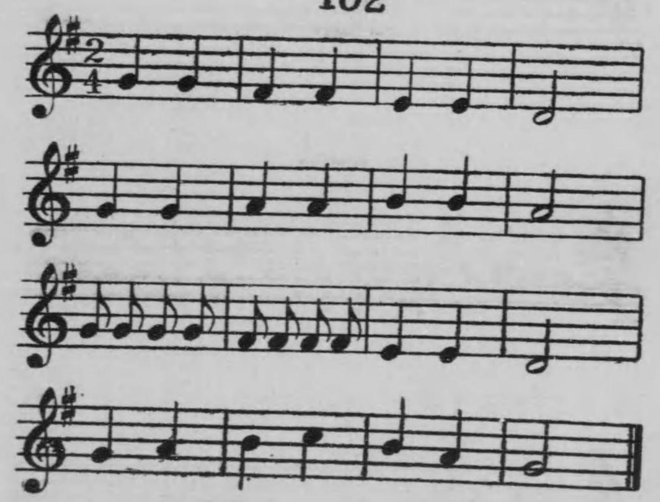


ト　調

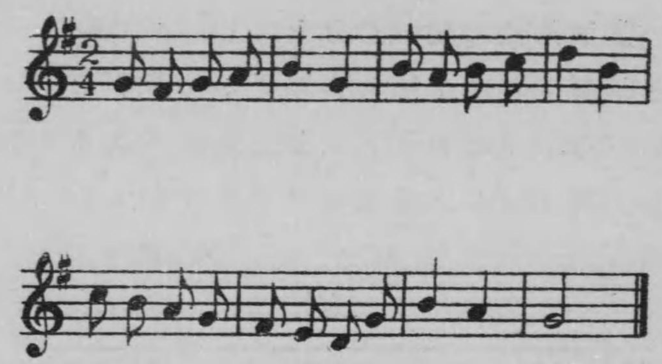
調子記號に**嬰一個**を表はし、第二線を**主調音**とする**ト調**を教授する。

前同様、**第二線**を**ド**として唱ふべきことを了解せしめ、順次練習を進める。

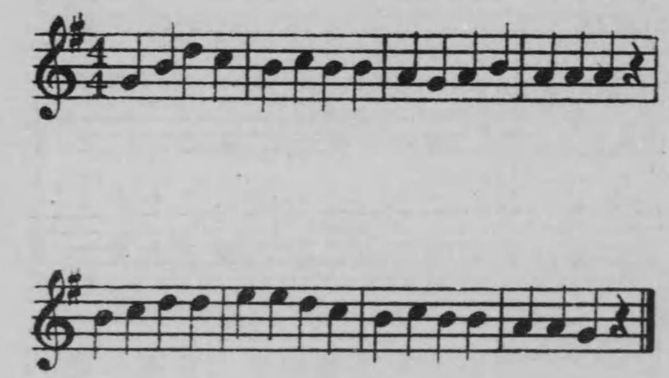
102



103



104



樂譜に親しむ

ハニホヘトの五つの調子については、一通り通過したので、一般歌曲の教授に於て、樂譜視唱法に入る事となるのであるが、何れも未だ、おぼろげに了解したに過ぎない。此場合に、或一つの調子についてのみ稽古してゐると、他の調子が讀めなくなる。從つて　折角築きかけた土臺がグラツク事になる。さうかと云つて、歌曲の教授に於て、此調子を交互に提出すると云ふ事は、實際に出來難い事である。或時代に於ては、或一種の調子に於て、讀譜に慣れしめてから進む、と云ふ方法を取らねばならぬ場合もあると思ふ。此時に折角習つた外の調子を全々留守にしたくないのである。

そこで、音階·音程の練習をなす時に譜

を示して、出來るだけ譜面上の調子を、交互に取扱つて行くことである。此の場合には、既習の音程を使用して差支ない。必ずしも新らしい音程を課する必用はないのである。但し既習の曲節に一寸手を入れて、變化を與ふる事は、最もよい方法であると思ふ。

三拍子

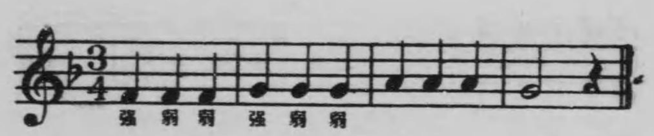
三拍子　各小節(一仕切)の各々を三拍に數ふべきものを、三拍子と云ふ。小學校に於て普通に用ふる三拍子は、**四分の三拍子**である。卽ち各小節に、四分音符三個、又は　これと同格の音符があつて、四分音符一個を一拍に數へるのであることを知らしめ、**休止符**も其の數に入るべきことを會得せしむ。

三拍子の性質　三拍子は、第一拍が強

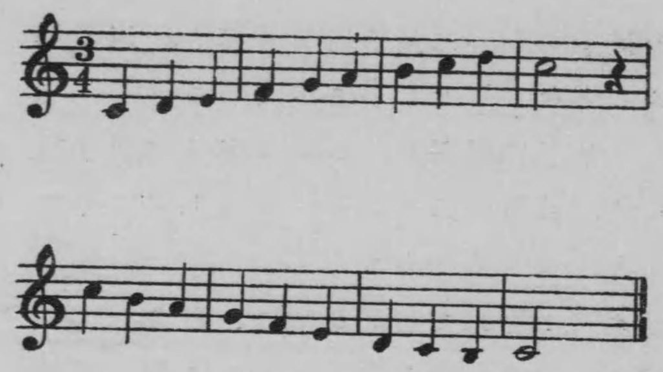
聲で、第二拍と第三拍が弱聲たるべきものであることを知らしめ、小節內の强弱の樣子から、二拍子·四拍子等と、趣の異ふことを了解せしむるのである。

三拍子の强弱を、わかり易く說明するには、音符の大きさを、加減して書くことも、又一策であると思ふ。(104番參照)

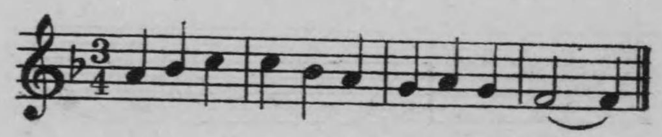
タクトを以て拍子を取り、兒童にも同樣に取らせ、譜を指して數ふる等、適宜の方法あるべし。



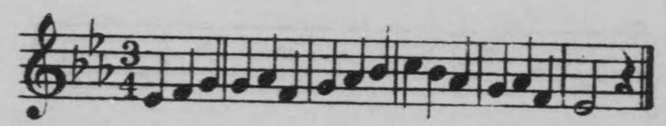
104



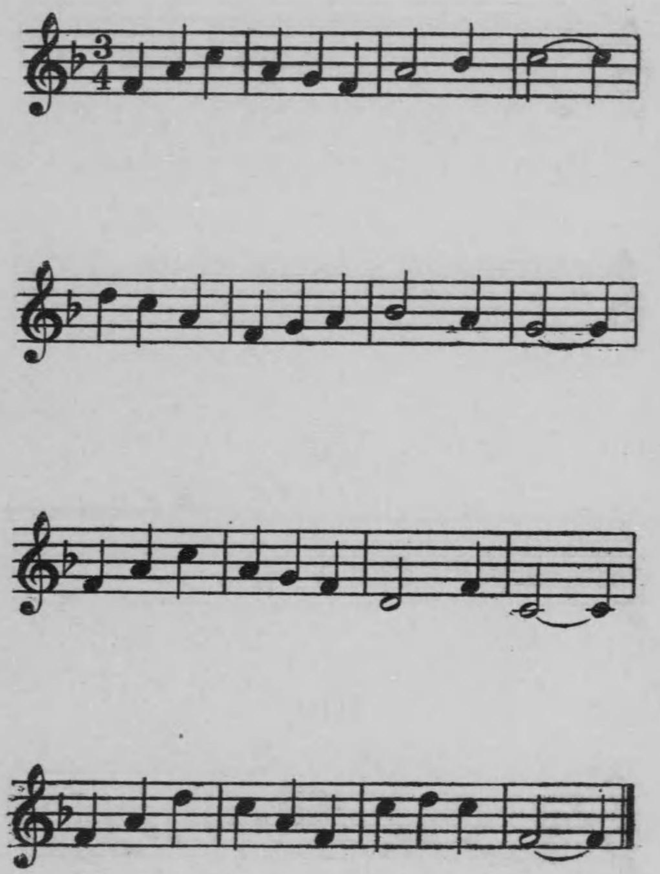
105



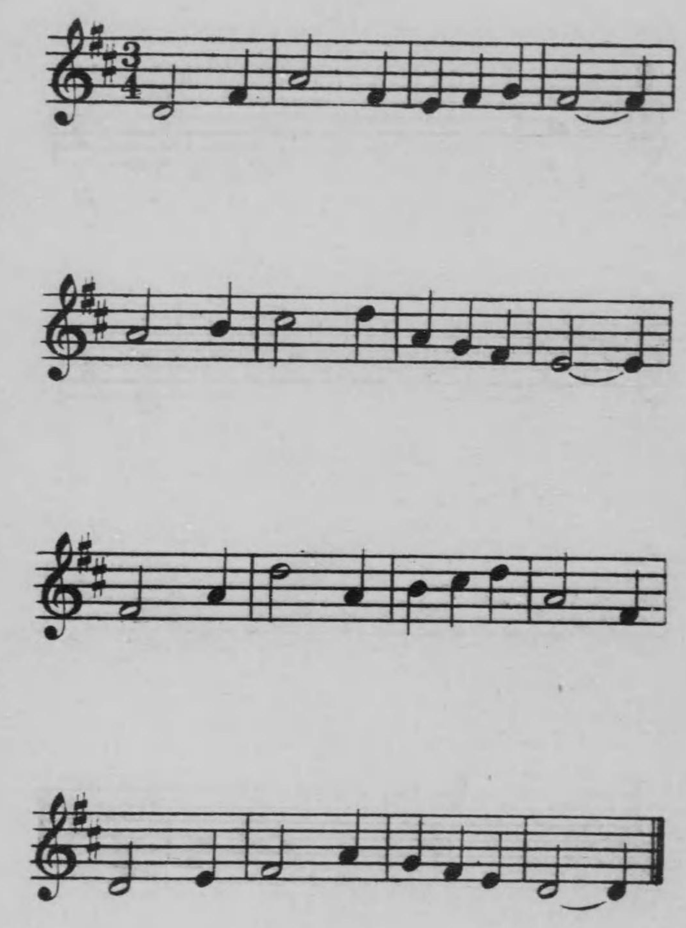
106



107

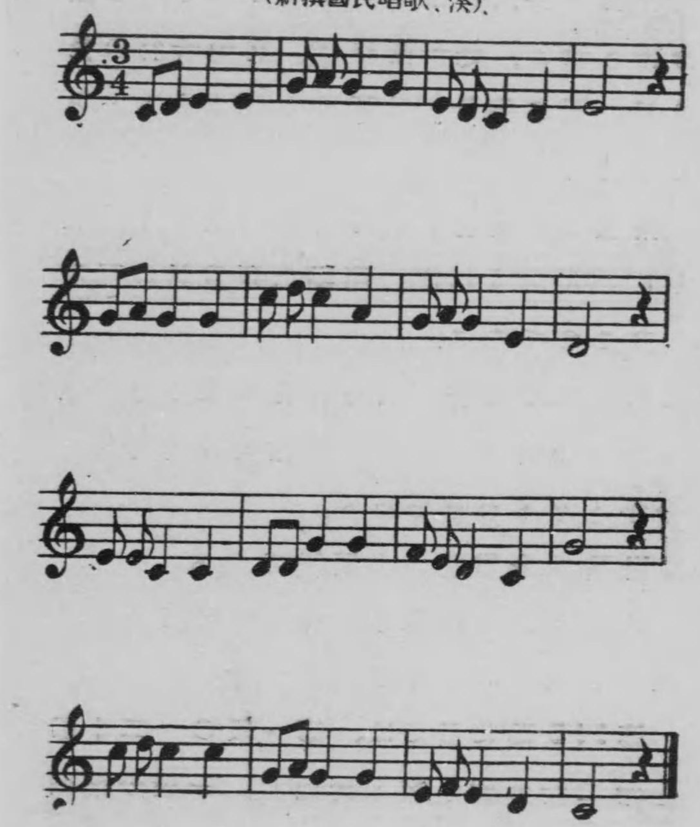


108



109

(新撰國民唱歌、湊)



附點音符

音符の右横に點を附けたものを、**附點音符**と云ふ、點が附けば、其の音符の長さが、更に半分だけ延びるのであることを知らしむ。

附點二分音符　二分音符の長さを、假りに二尺とすれば、附點二分音符は三尺となるのである。

附點四分音符　四分音符の長さを、假りに一分間とすれば、附點四分音符は一分半となるわけである。

附點八分音符　も同様である。

此の一倍半の事を了解せしめてから、練習に入るのである。

第**110**番に於ては、第一段の一二小節と第二段の同小節と對照し、一段の第四小節と、二段の同所とを對照し、第三段

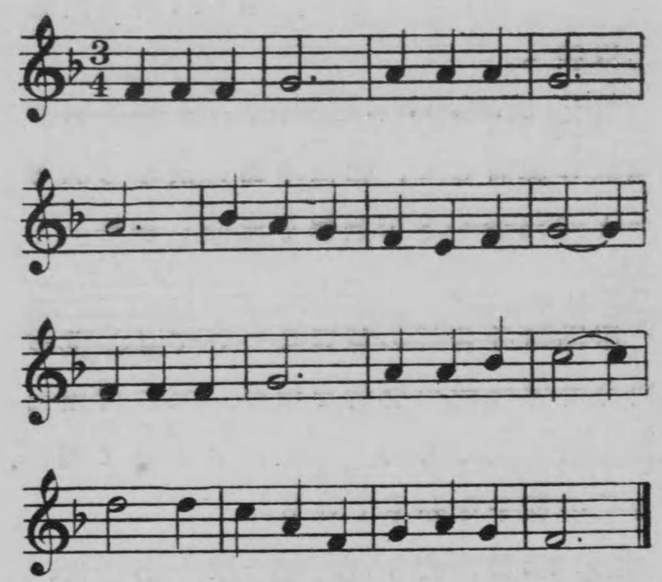
と第四段等、同様に對照して、其關係を會得せしむるのである。第**111**番も同様に取扱ふ。

更に 54・55・56・61・84・93・107・108 番の内を適宜に練習して、第四小節に於ける**スラー**と附點音符との關係を充分に理解せしむる。

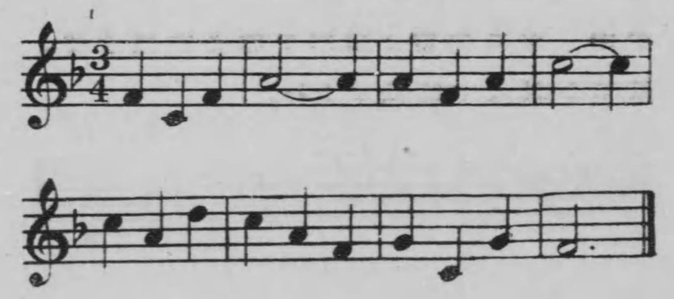
附點四分音符の練習については、先づ四分音符單位の音階を唱ひ、次に附點四分音符と八分音符との組合せとして唱ひ、音長の様子を知らしむる。

第**113**番に於ては、第一段と第二段、**114**番**115**番に於ては、第一小節と第二小節　第三小節と第四小節との様子を、拍子を數へて吟味せしむ。

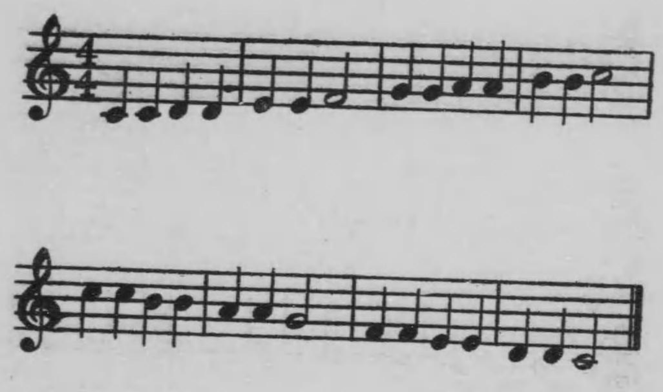
110



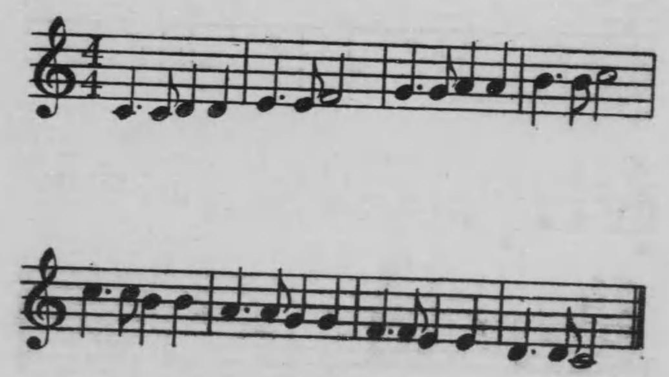
111



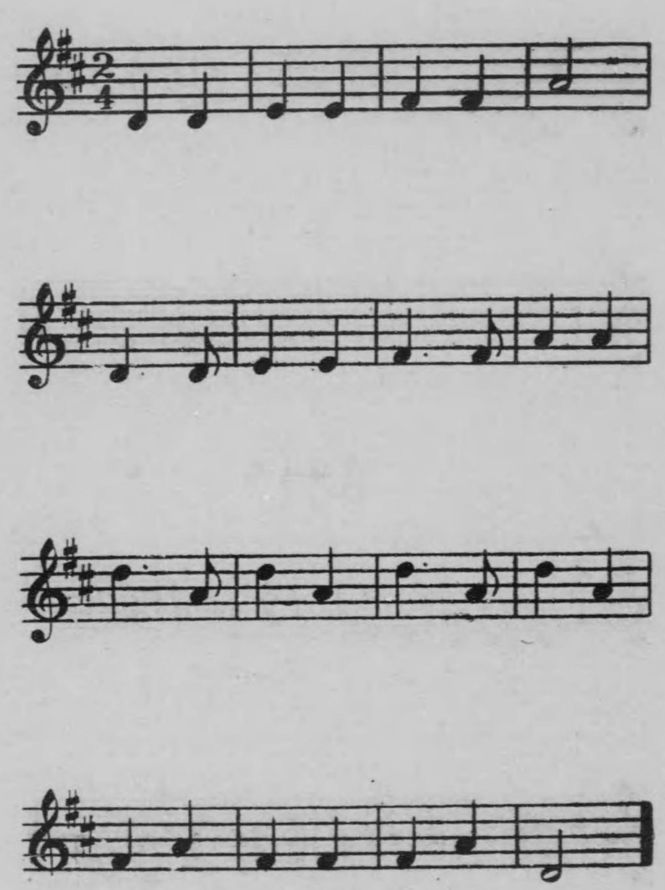
112甲



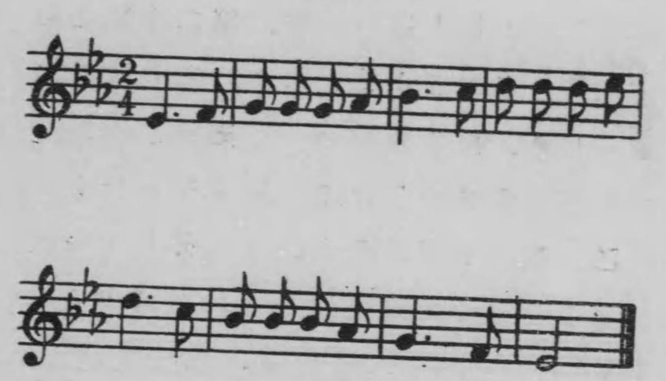
112乙



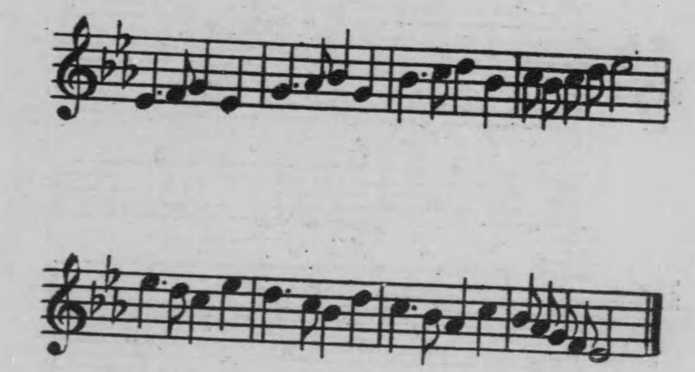
113



114



115



第116番に於ては、甲と乙、乙と丙、各々の第一小節と第一小節、第二小節と第二小節と各段各小節につき、其の關係を知らしめ、此の曲を以て、充分に附點音符の事を會得せしむる。兒童を二分して甲乙、乙丙を唱ひ合せ、又三分して甲乙丙を唱ひ合せる等適宜の方法を講ずること。

116甲

116乙

116丙

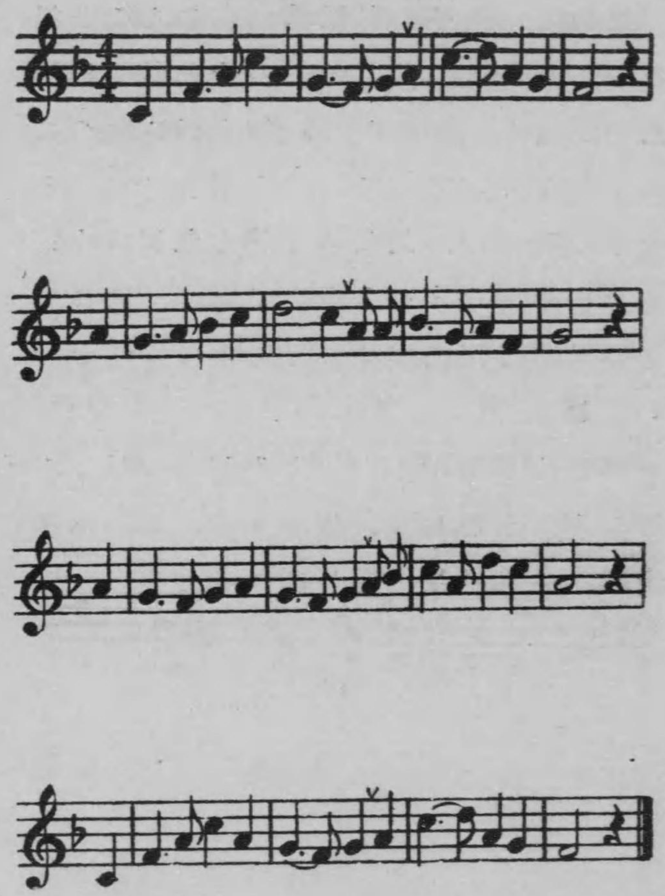
弱起拍子

樂曲は　拍子の弱聲部から起ることがある。これは、其の始めの音を弱く(拍子上)唱ひ出したいときに、斯う云ふ變つた拍子を作るのである。此の場合に於ける拍子の計算は、最後の小節と最初の小節とを合せてなすべきものである。時に中途の段落で解決することもあることを知らしむ。

尋常小學唱歌の　おきやがりこぼし、茶つみ、曾我兄弟、廣瀨中佐、霜、八幡太郎、近江八景、等皆これである。

117

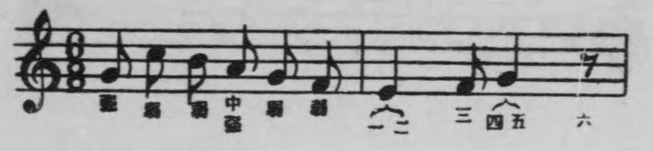
伊澤小學唱歌、秋景



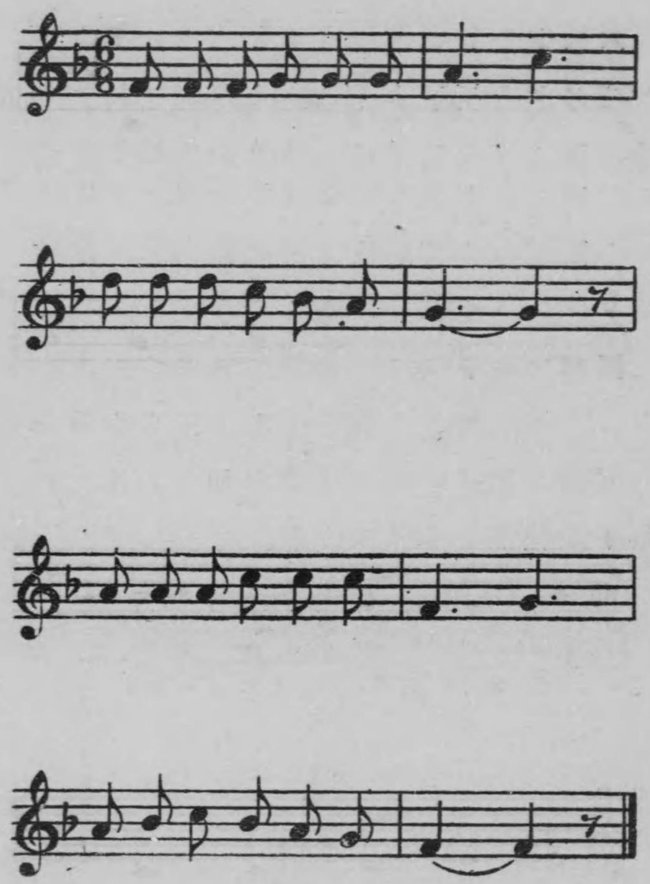
六　拍　子

六拍子　各小節の各々を六拍に數ふべきものを六拍子と云ふ。小學校に於て普通に用ふる六拍子は、**八分の六拍子**である。即ち各小節に八分音符六個、又はこれと同樣の音符か休止符を保ち、八分音符一箇を一拍として數ふるのである。

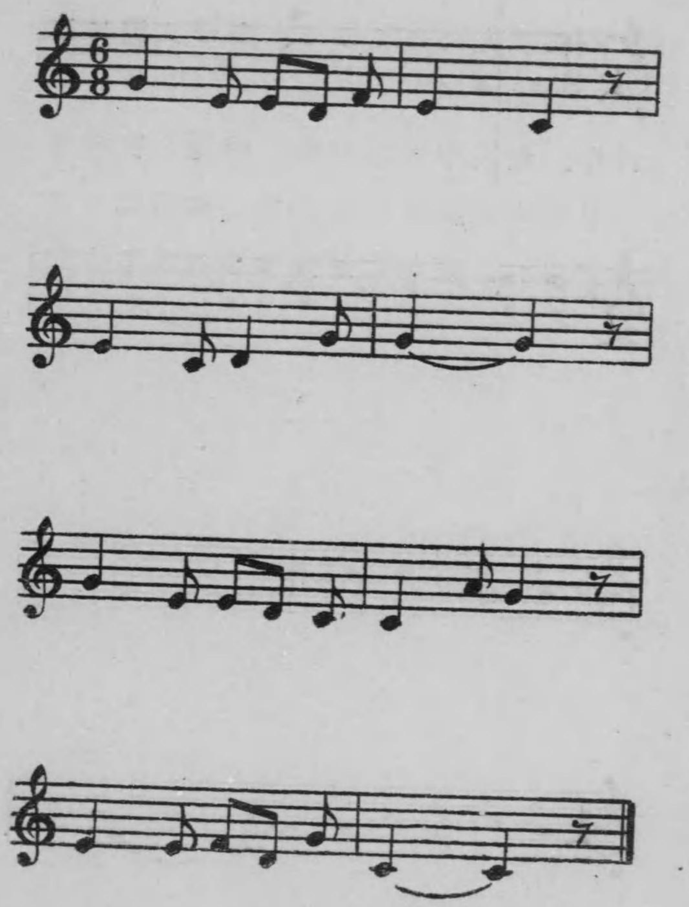
强弱の樣子は、三拍子の重なつたものとよく似て居て、斯うである、と小節内の强弱、拍子の取り方等を知らしめ、六拍子の樣子を味はゝしむ。



118



119



樂譜の運用については、述べたい事も書きたい事も澤山にあるが、本書の目的は、一線累進にあるので、其の大體は述べたつもりである。

書中、教授事項の前後、例題の交換等は、教授者の御考によつて、如何樣にも鹽梅せられ、適切に運用せられんことを望む。

複製を許さず

轉載を禁ず

大正拾參年八月五日印刷
大正拾參年八月八日發行

定價金壹圓參拾錢

著者　保科寅治

發行者　東京市芝區松本町四十四番地
合資會社共益商社書店
代表者　白井保男

印刷所　共益商社書店印刷部

發行所　東京市芝區松本町四十四番地
合資會社共益商社書店
電話高輪四〇五七
振替東京一五〇八

263.3
205

終